

ラジオ・サイ マンスリーE ジャーナル
ハートトゥーハート
Heart 2 Heart (H2H) 特集

以下の論説文は(少し長いかもしれませんが)、スワミとその使命に対する、でたらめで、悪意に満ちた誹謗中傷^{ちゆうしやう}に対し、詳細かつ理路整然と、またきっぱりと異を唱えるために、特別にしたためたものです。

この論説文は、私たちが受け取ったたくさんの手紙に基づいています。もしも帰依者が偽情報に出くわしたときは、この論説文で指摘された項目を、時間をかけて吟味するだけでなく、虚偽をはねつけるためにも活用してもらいたいと願っています。神の化身とはどういうものか、人類のために、スワミがこれまでやってこられたこと、そして現在も続けられていることをより良く知ってもらうために、帰依者たち、特に、より若い方たちを対象に、幅広い(H2HのEメール ジャーナルの)発行部数を通して、呼びかけがなされています。

残念ながら、スワミの使命、そしてその教えも十分には知られていません。むろん、スワミはその愛をシャワーのように与えるためにやってこられました。しかし、私たちは、その愛を享受するだけでなく、それをスワミのプラサーダム(恵み)として受け止め、できるだけ多くの人々と分かち合うことを求められているのです。この論説文を注意深く読むことで、あなたがたに神の化身シュリ・サティヤ・サイ、その栄光そしてその使命がより良く理解されることを願っています。

00—00—00

神の化身と疑り深い人々

G・ヴェンカタラーマン教授

1. はじめに

私は、新聞でときおり見かけるような反スワミのひどい記事、またトークショーでよく見受けられるような反スワミ的な見解に対して、やむにやまれずこの記事を書くに至りました。他の場所でも、最近ひんぱんに見られるような事象に対して、私はこれまで冷静な考察を加えてきました。この論説では、スワミに対する風評のいくつかを具体的に取り上げることにしましょう。何らかの反論も必要と思われるからです。

スワミに対する攻撃はこれまで多くの人々からなされてきました。もともとこのキャンペーンの先頭に立つ人たちは、あいまいかつあやしげな経歴を持つ、取るに足らない人たちなのですが、皆が皆同じように取るに足らないと片付けてしまうわけにはいきません。また、世間の人々が誘導された誹謗中傷に加わるという事実は単に、普通の人でさえ、よく調べることがなければ盲目にもなるし、偏見の奴隷となってしまうのだということを表しているにすぎません。偏見を持つ人は、たとえどんなにインテリであったとしても、よく考えもせ

ずに結論に飛びつく迷信家と同じです。

これから考察を加えていく風評には、基本的に三つのタイプがあります。一つは、**ヒンドウスタン タイムズ紙 (The Hindustan Times)** のヴィル・サングヴィ氏 (Vir Sanghvi) によるもの、次に、ND テレビのトークショーのスワミ・アグニヴェーシュ氏 (Swami Agnivesh)、三つめは、そのトークショーに出ているマジシャンの P・C・ソールカー氏 (P・C・Sorcar) によるものです。

こういった風評のいくつかは新しいものではなく、たとえばスワミが「私は神である」と言っていることについてとか、他にはスワミの奇跡に関するものです。実際そのような風評は何十年も前からあります。いくぶん「新しい」主張は「誹謗中傷」に関するものです。この中傷キャンペーンは病んだ心を持った人々によって数年前から始まりました。

2. 名誉毀損

まず、「誹謗中傷」というもくろみについてです。サングヴィ氏はこう言っています。一連の訴えは三人の人物から出たものであり、たとえその原告のうちのだれかが嘘をついているとしても、全員が嘘つきであるはずはない、と。言わせていただきますが、ここ数年間ずっと私はこの馬鹿げた茶番から離れていました。まったく一言でも信じるに足るような根拠がなかったからです。何年もの間、私はスワミとの懇意な関係を享受してきました。こうした関係はスワミを誹謗中傷するような人たちにはだれにも与えられなかったものです。断言できますが、**あの汚い、意図された攻撃は、まったく根も葉もない、根拠のないものです。**もちろん、批評家たちは私がこう言ったことに対していっせいに非難を浴びせることでしょう。でも、かまいません。

私はここ何年もの間、この茶番について書くことを避けてきましたが、今これを持ち出したのにはわけがあるのです。よくあることですが、最近、昔の学生が私を訪ねてきました。彼と話しているうちに、「非難攻撃を受けている」人たちのリストに彼自身も入っている、ということを知って非常にショックを受けました。その言いがまったくのたまたまだったので、彼がそれに対してどう対処するつもりなのか尋ねました。彼は力なく答えました。「どうしたらよいのかまったくわかりません」。「博士もそのネットをごらんになり、私だけでなく、昔の学生たちのいかに多くがそのリストに載っているかお知りになったら、さぞ驚かれることでしょう。だれかが私たち卒業生のリストを持っていて、単純に皆の名前をあげて言っただけのように思えます。これが事の次第です！」。

私は呆然としてしまいました。職業柄、注意深く、慎重であるよう訓練されていたので、この学生が去ったあと、実際にインターネットを調べてみました。私は愕然としました。ここでさまざまな分野で実際に働いている人たちの名前が挙がっていたのです。彼らは、何年もの間私が非常に良く知っている人たちでした。実際、彼らの生徒時代の思い出を我々の書庫に残していたほどです。彼らのだれもがスワミを心から信愛していました。彼らは昔のすばらしい瞬間を思い出させてくれます。25年も前にさかのぼって、当時のすばらしい愛を一瞬一瞬よみがえらせてくれるのです！ この神話の破壊者たちによって、彼らが口から出まかせのおしゃべり屋として取り上げられているのは、実に驚きです。サングヴィ氏は、おそらくご自分の見解に固執しておられるので、私の言うことなどには耳を貸さないでしょうが、私は75年という私の全生涯をかけて主張するつもりです。私はずっと真実に徹してきましたし、嘘つきの集団の一員になることで何も得るものはない

のです。サングヴィ氏は私が騙されていると思うかもしれませんが、私は退職後ずっと15年間ここで暮らして、自分で体験し、見てきたことの方を信じたいと思います。それに、インターネットのリストに挙がっている名前の青年たちは、たいてい私が個人的に知っている者たちです。

この中傷の大部分を始めた人たちの中の一人、ロバート・プリディ氏(Robert Priddy)は、オーストラリアにある大学の二人の副学長もその申し立てを支持している、と主張しています。これは広く世間に受け入れられています。しかし、私は、「その副学長らが今までに一度でもここを訪れたことがあるのですか？ 我々の先生や生徒たちのだれかと話しをしたことがあるのですか？」とお聞きしたいと思います。決してそうは思えません。実際、彼らの名前や所属は明らかにされていません。しかるに、私たちは、この男の言っていることを信じこまされることになるのです。私は、ある期間ここで副学長として働いたことがあります、15年の間ずっと教師をしてきました。今でも教えています。ここを一度も訪れたことのない、名もない人々の言葉よりも私の言葉の方がより信憑性に欠けるというのでしょうか？

これはもっとも言いたくないことなのですが、サングヴィ氏は、インド科学アカデミーやインド国立アカデミー(私は、その両者の選出会員なのですが)を含むインド物理学コミュニティのお歴々と話しができ、私の人格と同様に学業証明書をも調べられるところにおられます。サングヴィ氏は、カルパッカムにある BARC、IGAR や DRDO ハイデラバードにある ANURAG を訪れて私のことを調べることもできますし、価値観というものの私の真摯な態度について人々がどんなことを言っているのかを調べることもできます。特に、私の持っている資格や品位については、原子力委員会で健在のすべての委員長に尋ねることができます。BARC の理事として働いているすべての人に、そしてとりわけ、ラージャ・ラーマナ先端技術センター理事のヴィノード・サヒニ博士(Dr. Vinod Sahni)、インド科学大学の A・K・スード教授(Prof. A・K・Sood) (パトナガール賞を含む数多くの賞の受賞者)にです。これはすべて、自分のことを自慢したいからではなく、匿名というマントの影に隠れているのではないということを強く言いたいからなのです。

私が、老齢をはるかに超えたとき、政府からさらに2年延長して働いてほしいとの申し出がありました。私はここプッタパルティへ来て皆のための仕事がしたかったので、丁寧にお断りをしました。なぜ、私がそんな選択をしたかですって。なぜなら、私はババに深く感銘を受けていたからです。ババが私にそのように頼んだわけではありませんが、ここで私が目にしたものは、私にとって十分でした。

あえてこういった選択をしたのは私一人ではありません。18年もの間、デリーにある全インド医科大学で仕事をされたサファヤ博士(Dr. Safaya)という方がいます。サファヤ博士は1991年に自発的に(当時彼は局長という立場で働いていたのですが)仕事を辞めて、スーパー・スペシャリティ・ホスピタル(高度専門病院)を率いるためにここへやって来られました。それ以来サファヤ博士はここにおられます。いずれにせよ、私たちの信憑性は少しも価値があるようには思われていないようです。しかし、「先進」国から来た人たちの主張は、彼らがとても「開放的」であるがゆえ、一般に信じられがちです。彼らは開放的かもしれませんが、たとえば、幼児虐待といったある種の事件に関しては、まずだれかが有罪とされ、それから判決が下されてのち、初めて無罪とされるのです。このように、この匿名のオーストラリア人の二人の副学長は、いかにも本当のこのように思えるからという理由で、すぐさま偽情報にかかわったのでしょう。実際にその二人の副学長が存在するかは疑わしい限りです。もう一度聞きますが、その二人の副学長が本当に実在するならば、なぜ二人の名前やその所属団体は明らかにされないのでしょうか？

サングヴィ氏は少なくとも訴えのいくつかは真実に違いないと主張しています。悪名高いBBCドキュメンタリー番組に主演しているその中の一人が、さまざまな誹謗中傷^{ひぼうちゆうじょう}をでっち上げてカリフォルニアで訴訟を起こした結果、一人の証人がその人物の訴えがつつまが合わないことを明らかにしたために、その訴えを取り下げたという事実を、サングヴィ氏は知っているのでしょうか？ いいですか、これがそのスター証言者なのです。だれもがこう言って詰め寄りました。「彼はテレビに出ている男だ。君は彼が嘘をついてるなどと言うつもりなのか？」。私はこう尋ねます。「もし彼の言い分が本当だとしたら、あの法廷で起きたことは何だったのですか？ もし彼が完璧な訴訟を起こしたのだとすれば、なぜ、訴えを取り下げ、アメリカでもインドでも二度と法廷で訴訟は起こさないと同意したのですか？」。(この訴訟の取り下げに関する詳細は H2H で報じられています)。

いずれにせよ、疑わしい経歴で申し立てを起こすような人がいたら、その主張はすぐさまよく調べられるべきです。しかし、私のような者が異議を唱えるとき、私たちは皆利害関係を共有している者の集まりになります。あるいは、私たちは目をくらまされてしまった者たちか、ただの愚か者たちということになるでしょう。サングヴィ氏がカラム博士(Dr.Kalam、インド大統領)を軽蔑的に扱うやり方はそのことをよく物語っています。私たちの大統領をこんなことに引きずり込むつもりはまったくありませんが、私はおよそ二十年近くカラム博士との付き合いがあります。サングヴィ氏に一言、二言を言うくらいの義務はあるように思われます。よく調べもしないジャーナリスト的な文書によっておおいに貢献してきたと思い込んでいるような百人の人々に比べたら、カラム博士は、はるかに多くの貢献をしてこられました。何年もの間、私は、カラム博士がその在職中に見事なリーダーシップを発揮されるのを見てきました。カラム博士が大統領になってからは、いかにして、そんなにも違う仕事に取り組まれるのだろうかと思惑に思っていました。大統領は、若い学生たちと会い続け、彼らの精神を鼓舞し続けるというすばらしいやり方で私の疑問に答えたのでした。毎日、大統領は少なくとも500人の学生たちと会っています。しかるにカラム大統領はつねにこのように理想にあふれた人でした。アグニ(ロケット)が初めてその試射に成功したときのことです。当時、防衛大臣の科学顧問だったアルナチャラム博士(Dr.Arunachalam)はカラム博士を抱きしめてこう言いました。「君はまったくすばらしいことをやってのけた。何が欲しいかね？ 言ってごらん、私がかねてあげよう」。カラム博士が何と答えたかわかりますか？ カラム博士は、こう言いました。「私たちのハイデラバード研究室の施設に3万本の木を植える資金と、^{しかうん}鹿苑を作るための資金が欲しいです」。サングヴィ氏によって不必要に引き合いに出される、これがカラム博士という人なのです！ それなのに、半分だけ真実の提供者は単に若者の心を毒するだけでなく、おそらくは年長者の心までも毒しているのです。

スワミに引きつけられたのはカラム博士だけではありません。陸軍元帥カリアッパ(Cariappa)にまでさかのぼります。軍隊からだけでも、バガヴァンのもとへとやって来た人は大勢います。皆トップレベルの人たちです。司法界からは、バガヴァティ判事(Justice Bhagavathi)という、最高裁判事を経て人権委員会の委員長になった方がいます。サングヴィ氏とその同類にお尋ねします。「あの数々の申し立てに少しでも真実味があったとしたら、あなたは、バガヴァティ氏のような人物がサイ・ババのごとき人物、そしてその団体とかかわったと思いますか？ バガヴァティ氏が自身の名誉のことを考えなかったのでしょうか？ バガヴァティ氏だけでなく、故ナニ・パルキヴァラ氏(Nani Palkhivala)も、ババによって創設されたシュリ・サティア・サイ大学を監督するトラストの一員だったことを、サングヴィ氏はご存知なのでしょうか？」。

読者の皆さん、私にはなぜ聡明な人々がその知性を棚上げにしてよく考えもせず、既得権益から言いふらして回るような凡庸な人たちの言うことを鵜呑みにするのか、理解できません。どんな人も、XやYさんが何か言っているからというだけで、皆の前で潔白を証明しなければならないということなのでしょう。たとえそうだとしても、彼らの言っていることを自分でよく調べもせずにひどいことを書き立てるべきなのか？ とお聞きしたい。ババ批判の第一人者、ルーシ・カランジャ氏 (Rusi Karanjia) はまさにその通りのことをしました。彼は職業的な一貫性をもってそうしたのです。ジャーナリズムの倫理に一体何が起こったのでしょうか？ このインターネット時代においては、もうどうでもよくなってしまったのでしょうか？

3. スワミの社会事業——スーパー・ホスピタル

次に、スワミの社会事業計画に関する批評家たちの傲慢なコメントについて述べたいと思います。サングヴィ氏いわく、「サイ・ババがプッタパルティの人々のために病院、大学(しかも不釣り合いなことにプラネタリウムまでも)作ったことは認めよう。しかし、そのことはサイ・ババがある種の博愛主義者であることを示しているにすぎない。ヒンドゥー教において、宗教上の哲学的精神は真新しいことではない。ラマクリシュナ団体はサイ・ババがこれまでにやってきたこと、そしてこれからも含めて、それ以上にはるかに多くの貢献をしている」。サングヴィ氏は他にも辛らつなことを言っていますが、それらは無視することにします。

サングヴィ氏にとって、批判力のない新聞のページが開かれているのは幸いです。科学界では、その手の馬鹿げた茶番から逃げ切ることはできません。というのも、私の所にはおよそ70もの、世界中で出版されている専門雑誌に掲載された科学論文があります。自然科学界では、もしだれかが支持を得られないようなことを書いたなら、たちどころにその論文は拒絶されてしまいます。ジャーナリズムが信頼するに値する誠実さを、そうでないものと区別して誇っているのは驚くべきことです。しかしながら最近の風潮では、彼らがジャーナリストという一つの(特権的な)ブランドを代表しているのだから、言いたいことは何でも言いかまわない、ということのようです。自然科学界で言えるのは、私たちはもっと客観的だということです。だれかがノーベル賞を取ったとします。すると次に彼が書いた論文はだれか他の人のものだと批判的に扱われたりします。

先ほどの言葉をちょっと考えてみましょう。サングヴィ氏はスワミがプッタパルティの人々のためにあの病院を建てたと言います。確かに病院は物理的にはプッタパルティにあります。しかしその総合病院に関する限り、人々はアーンドラ・プラデーシュ州全土からやってきます。スーパー・スペシャリティ・ホスピタル(高度専門病院)に関しても、断言できますが、H2Hの読者なら皆、その実情がどういうものであるかを知っています。それでも公に言っておきますが、人々はインドの全州からだけでなくネパールからでもやって来ます。そこへ来た人はだれでも、他の国々から来た人もそうですが、カースト、主義主張、人種あるいは宗教にかかわらず治療を受けることができます。最近では、西ベンガルからやって来たマルクス主義者がいます。彼もまた、同じような病気の他の患者と同様に心臓治療を受けました。サングヴィさん、愛に国境はないのです。無限の愛の化身ババ、それが本当に何を意味するのか、ほんの少しも理解することなく、あなたが無責任にババのことを書かれるのは残念なことです。

サングヴィ氏はスワミの病院をあたかも通常ありきたりのことのように片付けてしまっています。たとえば、

<http://www.sathyasai.or.jp/>

プッタパルティの病院だけでも、創立以来15年間に1万5千件以上の心臓外科手術が行われてきたことを彼は知っているのでしょうか？

ここに皆さんの、そして悪口を言う人々、同様にヒマラヤ的愛情表現を見くびりたがっているような人々の目を開くようにと願って、ある数字を披露しましょう。

プッタパルティのスーパー・スペシャリティ・ホスピタルについて

(1991年11月22日の開院から2006年9月30日まで)

心臓部局への受診、外来患者総数 685, 731

心臓外科手術総数 15, 844

<内訳>

バイパス外科手術 1, 997

弁膜外科手術 6, 178

先天性欠陥外科手術 6, 988

大動脈外科手術 55

心臓腫瘍外科手術 171

その他の外科手術 495

計 15, 884

泌尿器科手術の合計

(1992年11月22日から2006年9月30日) 30, 020

眼科外科手術数合計

(1994年11月22日から2006年9月30日) 29, 564

眼科におけるレーザー外科手術数合計 6, 328

バンガロールのスーパー・スペシャリティ・ホスピタルについて

(2001年1月21日の開院から2006年9月30日まで)

心臓部局の外来患者数合計 258, 734

神経科、神経外科外来患者数 137, 742

心臓外科手術数合計 7, 063

神経外科手術数合計 6, 326

以上は、統計上のほんの一部にすぎません。どこか他の所で詳細全部をごらんになれることでしょう。ここ

<http://www.sathyasai.or.jp/>

であげた治療の詳細に関して大事なポイントは、それが100パーセント無料だということです。外来患者の診察は無料、エコー、ドップラー検査、血液検査なども無料。カテーテル法、薬、医師の診察料、手術費、入院費用、集中治療室の費用、食費などすべて無料です。人々は財布を持たずにやって来て財布を持たずに出て行きます。読者の皆さん、バンガロール、ムンバイそしてデリーの私立病院で手術を受けるのにいくらかかるのかどうぞ調べてみてください。心臓の弁を置き換える手術、診察にそもそもかかる費用、手術に先立ってのさまざまな検査、手術そのもの、投与される薬品、入院に必要な費用などなど。そして病院にいる下層の小間使いたちによって無慈悲にも取り上げられるチップも忘れないでください。**サンデー・タイムズ紙** (Sunday Times) のショバ・デー氏 (Shobha De) によるゲスト社説に基づいた、『不親切な病院』という題名の日曜特別番組を私たちが取り上げたことを思い出した方もいらっしゃるかもしれません。

私はサングヴィ氏に、そのように大がかりで、すべての人に無料の治療が提供されている「私立」病院が、北極から南極まで世界のどこにあるのか教えていただくことを要求します。ところで、ここには支払いを請求される余裕のある人々と支払いを免除されることができない人たちという二重のシステムなどはありません。サングヴィさん、もし匿名で、どこに支払いカウンターがあるのか見たければ、一度でも訪れてみるだけの聡明な誠実さがあなたにおありでしょうか？ そうすれば、その病院には支払いカウンターがないだけでなく、ヒンドゥー語、テルグ語、タミル語、カンナダ語、マラヤーラム語といった言葉でつねにアナウンスが流れており、治療が完全に無料であること、そしてもしだれかがお金を取ろうとしたならば、すぐに当局に通報されるということが患者にわかるようになっています。もう一度言いますが、検査にかかる費用、CTスキャンのような検査、血管造影のような処置に関する費用などまったくかかりません。弁の置換というような手術においてさえ、入院費用、患者に提供される食事、薬など前に述べたようにすべて無料です。それに、いかなる基金をも求めるような掲示板が一つもない、ということがおわかりになるでしょう。

実際、あなたがアシュラムへ来られたら、そこでも基金を募るような広告は何もない、ということがおわかりになるでしょう。私たちは週に七日、一日二十四時間番組放送をしています。今までに一度でも私たちが資金を募るような呼びかけをしたのをお聞きになったことがありますか？ シャンカル・チャンネルでの私たちのテレビ番組で資金を募ったことがありますか？（対照的に、同じチャンネルで番組を提供している人々の多くは定期的に資金を募っています。）同様に『サナータナ・サーラティ』でも、津波が起きたときでさえ、一度たりとも寄付を募ったりしたことはありません。（ところで、津波の時のことですが、1000万ルピー以上が救済に費やされました。H2H で詳細を報じています。）実に、世界中どこにも、どのサイセンターにも募金箱なるものはありません。その事実だけでも海外の帰依者を驚かせるだけでなく、多くの帰依者をセンターへと引き付けているのです。

医療の話題を続けますが、サングヴィ氏は、月の最初の20日間毎日、プッタパルティの多くの村へ移動クリニックが、無償の奉仕をする8人の医療チームとともに出ているのをご存知でしょうか？ この医療チームはアーンドラ・プラデーシュ州からだけでも600人の医師団の中から派遣されているのをご存知でしょうか？ この移動車にはドップラー検査の装置やレントゲン装置があるのをご存知でしょうか？ これらのサービスはすべて無料であることをご存知でしょうか？

サングヴィ氏は、インド国内に限らず、海外でもシュリ・サティア・サイ・セヴァ・オーガニゼーションによって医療キャンプが日常的に運営されているのをご存知でしょうか？ たとえば、ニュージーランドからの医療

チームは、フィジーを訪れて医療キャンプを運営していることをご存知でしょうか？ イギリスの医者たちは、アフリカで医療キャンプを運営していることをご存知でしょうか？ 実際、2005年には(スワミの80年御降誕の年でした)、英国の医師たちによる一年がかりのキャンペーンがありました。総数8,000件の眼科手術が行われ、アフリカの多くの国々に広まったのでした。すべてアフリカにおけるサイ・オーガニゼーション主催のもとにです。同じように、ケニアでは、サイネットと呼ばれるプロジェクトが行われました。マラリア予防キャンペーンの一環として特殊な処理を施した蚊帳が貧しい人々に配給されました。実際、ラテン・アメリカのいたる所でも、一年中医療キャンプが運営されています。

4. スワミの社会事業—恵みの水プロジェクト

次に、スワミの恵みの水プロジェクトについて見てみましょう。ND テレビ番組で、ある紳士があざけるようにこう言い放っていました。「ああそうそう、サイ・ババはパイプを通して水の供給を少しやってるね」。これは単に無責任な発言であるだけでなく、人には事実無根の話を公にする権利がないのと同じくらいある種の犯罪です。事実はどうなっているのでしょうか。我々はこれまで事実をすべて(H2H で)提供してきました。しかし、もう一度そのいくつかについて強調したいと思います。スワミが何の根拠もないまま、いかにひどい攻撃にさらされているか読者の皆さんにもわかっていただけることでしょう。

1994年から1996年の間、スワミはアナタプール地方で最初の主な「恵みの水プロジェクトを行いました。およそ30億ルピーが費やされました。その結果900以上の村で安全な飲み水が得られたのです。

これには、巨大な7つの夏用貯蔵タンクの建設と、中には直径約20インチのパイプも含まれていますが、およそ2,500キロのパイプラインが敷設されました。また、その水が運ばれてくるには、北から南まで500フィートもの勾配を汲み上げるポンプ揚水が必要だということになります。これは「大」プロジェクトでした。完成後、一年の稼働を経て、プロジェクト全体は、1997年10月にその州の人々にゆだねられました。1パイサのお金も要求されることはありませんでした。それは、愛という贈り物だったのです。私もその現場に居合わせたのですが、およそ10年を経てもなお、その時のことを思い出すと、今でも毛が逆立つほどです。

アナタプールは始まりにすぎません。それから、メーダクやマハーブナナガール(でのプロジェクト)が始まり、その後にチェンナイ・プロジェクトが始まりました。チェンナイ・プロジェクトのとき、何が起こったと思いますか？ まったく驚異的でした。しかし、私たちがあえて言わないせいもあるのでしょうか、世間にはあまり知られてはいません。そこで今そのことをすべて文書にして明らかにしたいと思います。

チェンナイでは、イギリス統治の時からつねに大きな水の問題を抱えていました。1954年までさかのぼりますが、唯一の望みは遠く離れたアードラ州のクリシュナ河から水を持ってくることがわかりました。行政が入って、ついに1983年、プロジェクトが着手されました。もちろん、華やかなファンファーレとともに、三人の有名な人物、インディラ・ガーンディー(Indira Gandhi)、N・T・ラーマ・ラオ(N・T・Rama Rao)、そしてMGR(現場監督)によって執り行われました。およそ12年が過ぎ、カンダレール——当時はブーディ運河と呼ばれていたテルグ・ガンガー計画の一部で、重要な運河ですが、それが完成しました。しかし、水はほとんどチェンナイに流れてくることはありませんでした。その理由は？ それは、その運河はもっぱら土工事でしたし、150キロという距離を超えて運んでくるには単に不十分なものでした。沈泥、(土壌にし

み出る) 浸潤そして運河壁の侵食という大きな損失があったのです。50億ルピーを超えるお金が費やされましたが、依然チェンナイは渇水でした。一方、北東モンスーンが何度もやみ、チェンナイはかつてないような大きな困難に陥っていました。

そしてこのとき、2002年の1月19日、スワミはチェンナイに水をもたらすことを宣言されたのです。ここからは、歴史になります。およそ14ヶ月以内で、最新の技術を駆使しながら、古い運河の廃墟の跡に新しい運河が造られました。そしてスワミの79回目の誕生日には、初めて水がその新しい運河に放たれたのです。

4日後、それはタミル・ナードゥ州の境界まで達しました。それ以来、クリシュナ河に水がある限り、チェンナイにも水があるようになったのです。7年間で、初めて、チェンナイの家々の蛇口から水が出るようになったのです。もはや高いお金を出してタンクローリーの汚く、汚染された水を買う必要はなくなったのです。ところで、チェンナイの人口は700万人です。

その後、スワミは、14ヶ月という短い期間で安全かつ処理を施された飲み水を、ゴータヴァリー河から東西ゴータヴァリー地方のおよそ500の村々にもたらすという、驚くべきゴータヴァリー恵みの水プロジェクトをやったのです。東ゴータヴァリー地方はとりわけ作業の困難な所でした。丘陵が多だけでなく森林が密集していました。おそらく、長い間放置されたことにもよるのでしょう。多くの部族がそこに住んでいました。ゴータヴァリー川からはたくさんの水が海へ流れ込んでいましたが、部族の人々は少しもそれを飲むことはできませんでした。スワミが集水の井戸を作り、濾過装置、そして困難な地域に水道管の入念な回路網を設けて、部族や村人たちに水をもたらしたのです。いいですか。そのプロジェクトが完成したとき、竣工式など行われず、どんなお偉方もおらず、演説も何もありませんでした。人々はバジャンを歌い、蛇口を開き水を貯めたのです。

ところで、そういった簡素さは、ブッタパルティ病院が開かれたときにも同じでした。私はそこに居合わせたのですが、何百人もの少年たちがヴェエダを唱え、総理大臣のナラシムハ・ラオ氏(Narasimha Rao)が飛行機でやって来て、病院の敷地に入りスワミに合掌(ナマスカル)して挨拶をしました。テープが切れ、ドアが開けられました。それから総理はスワミとともに病院へ入り、スワミは灯火式の火を灯したのです。それから二人は階段を上って手術室に行きました。手術室では、一人の患者が心臓外科手術を待っているところでした。すでに麻酔が施されていました。ヴェヌゴパール博士(Dr.Venugopal、現在の AIIMS、全インド医科大学の理事)が切開をするために待機していました。スワミが祝福をされ、その外科医のナイフが患者の肌に触れました。何のスピーチもなければ、ファンファーレも何もありません。その日、4件の手術が行われました。そして1945年には道路一本も通じてはいなかったような村で、無料の心臓外科手術の物語が始まったのです。

ところで、サングヴィ氏はプラネタリウムのことを皮肉っぽく語っていましたね。サングヴィ氏はこの大学について、またそのプラネタリウムが大学の資産だということを知っていらっしゃるのでしょうか？ 大学がプラネタリウムを持つのは罪ですか？ 文字通り、何十万の人々が毎年ブッタパルティへとやってきます。実際、世界中いたる所からやって来ます。彼らはプラネタリウムへ行き、私たちのスタッフが提供するショーを見ます。訪れる人の多くは貧しい村人たちです。貧しい人々はプラネタリウムショーを見るに値しないということですか？ プラネタリウムは大都市にあるべきで、それを見る特権があるのは都会の人々だけということですか？ この方はインドの村人に対して何という軽蔑心を抱いておられるのでしょうか！

サングヴィ氏はラーマクリシュナ・ミッションについて触れておられます。このことにもお答えしなければと思います。まず、私はラーマクリシュナ・ミッションに対して最高の敬意を払っていますし、最高の評価を抱いています。20世紀の40年代に戻りますが、私の父はカラチで働いていました。当時父は、カラチにいたスワミ・ランガナータナンダ (Swami Ranganathananda) の講演に定期的に通っていました。それから父はマドラスへ転勤になりました。私はそこで、高校の最後の2年間を過ごしました。有名な T・ナガール・マドラスのラーマクリシュナ・ミッション高校です。付け加えておきますが、私は折りに触れてラーマクリシュナ・ミッション発行の本をたくさん買ったものです。今でもときおり、そのいくつかの刊行物を読んでいます。私はラーマクリシュナの教えを読んできましたし、それらによって感銘を受けてきたと思っています。同様に、スワミ・ヴィヴェーカーナンドの書物や講話に感動を覚え続けてもいるのですが、また、ここで知り合った多くの方たちはラーマクリシュナ・ミッションを通してスワミのもとへやって来たことを付け加えておきましょう。おそらくその方たちの中でも、もっとも有名な方として故カストゥーリ博士があげられることでしょう。

5. 宗教を超越するスワミ

私は、最高の名誉が与えられているラーマクリシュナ・ミッションの存在にまったく賛成です。しかしながら、そのラーマクリシュナ・ミッションが、ババがこれまでに成し遂げたことを軽んずるために使われているのは、非常に不当なことです。両者の目的は違っています。サングヴィ氏はスワミをヒन्दゥー教の博愛主義者と位置づけたいかもしれません。しかし、私たちは、スワミが宗教を超えたより高い霊性の世界にそびえ立っていることを知っています。祈りを捧げるためにイスラム教徒たちがブッカパトナムまで6キロの道のりを歩いて行かなくてもいいようにと、スワミが70年代半ばにプッタパルティにモスク(礼拝堂)を建てたことを、いったい何人の人が知っているでしょう？

サングヴィさん、ここへはイスラエルからの人々も含めて、**すべての**宗教の人々がやって来るということをご存知ください。カザフスタンの大統領夫人は首都アルマトゥイから直接ここプッタパルティまで二度チャーター機でやって来られました。イランやトルコからも定期的にも人々が訪れます。仏教徒はブッダ・プールニマを祝うためにここへやって来ます。中国人たちは中国人の新年(チャイニーズ・ニュー・イヤー)を迎えるためにここへやって来ます。ちょうど数日前、宗教的熱狂(いつものことですが)のもとにクリスマスが祝われたのですが、ナイジェリアのチャールズ神父(現在はザンビア在住)はここでミサを行いました！ここで私が是非とも言いたいのは、ラーマクリシュナ・ミッションとこのアシュラムの間には、霊的、文化的な違いがあるのだということです。もちろん、ヴェーダーンタ哲学は、とても包括的であるがゆえ、つねに高い注目を集めていますが、あらゆる宗教は、一つの神への等しく有効な道として、愛という名の下に尊敬され、認められているのです。だからこそスワミは、キリスト教徒には良いキリスト教徒になりなさいと言い、イスラム教徒には良いイスラム教徒になりなさいと言うのです。またそれゆえ、ベীগム・パルヴェーン・スルタナ (Begum Parveen Sultana) とウスタド・アムジャド・アリ・カーン (Ustad Amjad Ali Khan) は、ここを定期的に訪れ、ダルシャンを受け、コンサートを行うのです。現在ここで半年に一回、交響楽団の演奏が行われているのはそういう理由からです。忘れてならないのは、ブラシャーンティ・ニラヤムは皆のためのものであり、ここにはサルヴァ・ダルマ・ストゥーパ(全宗教の搭)があります。同様に、プールナ・チャンドラ講堂では主だった宗教の絵画が見られます。ヒル・ビュー・スタジアムにも同じように、ブッダ、イエス、ゾロアスターの像があるのがわかり

ます。異なった宗教の聖霊が描かれている壁画が大学の講堂の壁を飾っています。ところで、私たちは、H2H でさまざまな機会に、いろいろな宗教に関する記事を掲載しているということも述べておきましょう。実際、ゾロアスター教に関する私たちの記事が世界中のゾロアスター教徒の特別な注意を引きました。彼らによると、他の出典物よりもこの記事によって彼らの宗教についてより多くを学ぶことができたということでした。

6. 神の化身に関する一側面

奉仕という観点を少し掘り下げてみることにして、三つのテーマをここで論じたいと思います。神の化身としてのスワミ、スワミが定期的に行う物質化という行為(一般的に奇跡と呼ばれるもの)、そして、スワミがもたらす精神の変容というものです。ある意味、三つは互いに相関関係があります。また、三つはスワミが神であるという、スワミの声明とされるものと関係しています。

スワミの言とされるものから始めさせていただきます。そこでは、スワミの言葉が、何の前後関係もなく、しかも一部分だけ、引用されています。悪口を言う人々はこう言います。「サイ・ババは自分が神だと言っていると言っている。何というたわごとだろうか！ もしサイ・ババが本当に神であるならば、なぜこれこれでもなく、しかしかでもないのか?」、などなど。まず最初にこう説明するとしましょう。スワミが神について語るときはいつも**ヴェーダーンタ哲学の脈絡**から語っているのであって、XあるいはYが神をどう考えるのかというような見地からではありません。ここは重要なポイントです。なぜなら世界には、彼らが神と考えているもの、あるいは神はこうあるべきだというさまざまな概念を持った人々であふれています。不幸なことに、たいいていの人々はヴェーダーンタ哲学における神の概念がどういったものであるのか、きわめて不明瞭な考えしか持ち合わせていません。スワミ・アグニヴェーシュ(かなりひどい、また私が思うに、何の根拠もない発言を意図的にしている人物)がわざわざヴェーダーンタを読み、この脈絡に関する事柄すべてを分析しているとは思えません。

ヴェーダーンタ哲学では、中心となる概念は、すべては神だということです。スワミがよく私たちにおっしゃるように、神以外には何も存在しない、ということです。それに、この表象としての宇宙において、神は直接的に目に見えるものではないということも付け加えなければならないでしょう。目に見えるものは、生命のあるなしにかかわらず、物理的な実体です。それらはどんなものであろうと、一つ確かなことは、それらの中に神が内在しているということです。そのことが何を意味しているのでしょうか?

ガンディーがかつて言った有名な言葉で、私自身とても引用するのが好きな言葉から考えてみるとしましょう。ガンディーは言いました。「すべてに浸透しているが、はっきりと定義できない、神秘の力が存在します。私はそれを見ることはできませんが、感じることはできます。」この力こそ、何と呼んでもいいのですが、シャクティであり、ガンディーによって神と同じであると認識されたものです。

ガンディーはぶっきらぼうにこう宣言しました。神のことはほとんどわからないが、二つのことは非常によくわかる。一つは、神が存在しており、偏在であること。二つ目は、ガンディー自身の言葉で最もよくその意味が伝わることでしょう。ガンディーは言いました。「単に知性を満足させる者は神ではない。神であるべき神は心を支配し意識を変容させなければならない」。後にガンディーは、神は愛と同一であると考えます。それは

偶然にもすべての宗教にあてはまるのです。

要するに、もし私たちが理論的に神のことを語りたければ、必然的に意識、あるいはより優れた宇宙意識について語らねばなりません。もし物理的な世界と関連して神を語るのであれば、そのとき愛について語らなければならないでしょう。神性に二つのレベルがあるのでしょうか？ クリシュナ神はあると強く言っています。クリシュナ神いわく、神は顕在の宇宙においては、内在的な神性として存在し、また物理的宇宙が存在しなくなる、目に見えない宇宙においては、超越的な神性として存在するというのです。そのことを科学的見地から理解しようとするならば、顕在の宇宙において、神はあらゆる存在の中に、活発なあるいは不活発な原子エネルギーとして内在しているといえるでしょう。さらに、生命体においては、神は生命力、すなわちプラナーとして顕れています。ギターの中で、クリシュナ神はこれらすべてを二つの重要な言葉、アディバウティカ〔物質世界と関係のあるもの、目に映るもの〕とアディ ダイヴィカ(神と関係のあるもの、目に映らしめる太陽)を使ってアルジュナに説明しています。

科学的には、私たちの宇宙は137億年前に生まれました。何十年の間宇宙の正確な年齢はきわめて不確かなものでしたが、COBE 衛星のおかげで、およそ137億年前に宇宙が誕生したことを確信させるだけの、かなり正確なデータが得られたのです。ところで、今年の物理学部門でのノーベル賞は COBE を考案、企画した人々、そして後にこの信じられないような発見をした人々に贈られました。ここで一つの疑問が生じます。もし、宇宙が137億年前に生まれたとしたら、その時に私たちの空間と時間も生まれたのであって、私たちの宇宙が存在しなかったという状態もあったに違いないのです。クリシュナ神は次のように確認しています。(『Universal Consciousness』を読んでみてください)神はそのときも存在していましたし、それが目に見えない神がどういうものであるかという由縁です。

目に見える形で顕れた神性についてもう少し語りしたいと思います。スワミは、すべては神であると言います。同じことがラーマクリシュナによって若かりしナレンドラに語られました。ナレンドラがスワミ・ヴィヴェーカーナンドになる以前のことでした。ナレンドラは冷笑的でした。ある日の午後、グルの所へと道を歩いているときに、このすべては神だという言葉に、どれだけ彼が不満を感じたかを実際に絵を描きながら述べています。実は、ナレンドラは独り言を言いながら、歩いていました。「この柵が神だし、この鑄鉄の門も神であると信じなきゃいけないなんて。何と馬鹿げたことではないのか?」。しかし、ナレンドラが師の前にやって来たとき何が起こったと思いますか？ ラーマクリシュナは優しくナレンドラの肩を叩いたのでした。すると突然、周りのものすべてが一つ一つ不思議な宇宙の一体性の中へと溶け込んでいったのでした。ナレンドラは今信じられないような平安、静けさ、そしてもはやそこから出たくないとされるような至福の中にいたのです。けれど、もう一度肩を叩かれると、ナレンドラは乱暴にその信じられないようなトランス状態から引き戻されたのでした。師は、ナレンドラに、ナレンドラが永遠の至福にふさわしい状態になるまでになすべき多くのことがある、と言ったのです。これらのことを全部私が言った通りに信じる必要はありません。すべてスワミ・ヴィヴェーカーナンド全集の中に書かれています。

さて、この回想のポイントは何でしょうか？ 簡単ですね。宇宙意識の状態が存在するということです。この状態は、物理的な宇宙が存在しないときにでも、それが存在しているときにでも、精妙なあり様で宇宙と重なり合っているということです。物理的な宇宙において私たちが目にするすべてのものは、この元々の宇宙意識から来ています。これがヴェーダーンタ哲学で中心となっている概念です。医学ノーベル賞を取ったハーバードの生物学者ジョージ・ワルド(George Wald)が以前宣言したように、すべてはこの「心の中にあるも

の」の物質化なのです。人類はこの宇宙意識を認識し得る、究極のアヴァター[神の化身]です。その上、文学、芸術、科学などを通してさまざまな方法でそれを花開かせることができます。

すなわち、物質的に実体があるものはすべて神性の一側面だということになります。この神性は明白に顕れたものではなく、間違いなく(見えない)潜在的なものです。特に、人間においては、メーダ シャクティ、すなわち世俗的な知性(科学における偉大な業績を可能にするようなもの)のように潜在的なものです。それは創造力(芸術、音楽、文学といったものを生み出すもの)のように潜在的ですし、最終的には気高い徳性のように隠れたものです。不活発な物において、内なる神性のほとばしりの真髄である宇宙意識は受動的な側面において存在しています。生命体においては、その構成原子において受動的な側面が存在する一方、気づきを与えるといった積極的な側面もさらにあります。生きているものは、自らが存在することを知っています。人間において、自己意識という能力は最高のものです。つまり、人間には、1)内なる神性のほとばしりを発見する可能性、そして、2)潜在的な神性に従って人生を生きるという潜在力がそなわっているのです。そのことがまさに、クリシュナ神がアルジュナに授けた最初の教えでした。クリシュナ神は言いました。「おお、アルジュナよ。あなたは人生を肉体の生と死の観点から捉えているのだ。あなたは単なる肉体ではなく、埋め込まれたアートマのための一時的な入れ物にすぎない。あなたの本質はアートマだ。しかるにあなたの人生における行いはすべて、その本質に沿ったものでなければならない」。そしてそれはまさにスワミによって何度も諭されたまったく同じ教えなのです。特にスワミが「あなたはだれですか?」という質問をするとき、スワミはクリシュナ神のように、私たちが肉体ではなく肉体とは別のものだということを思い出させてくれるのです。同様に、私たちは心(マインド)ではなく心とは別のものです。私たちは、永遠なるアートマです。

これは、よくいろいろな所でいろいろな人に脈絡に関係なく引用されるスワミの言葉を思い出させます。「私は神です」。そうです、ババはそう言います。しかし、ババはそこで話を終えませんか? 次の大事な言葉を付け加えてはいませんか? 「あなたも神なのです。唯一の違いは、私はそのことを知っていますが、あなたはまだそのことを知らないのです」と。神はサーカーラ ブラフマン[有形の神]のように、ただその教えを説くために、人の姿を取って現れたのです。ラーマ神はあるやり方でそれを教え、クリシュナ神は別のやり方で教えました。シュリ・サティヤ・サイ・ババもまた、この時代に一番ふさわしい方法でまさに同じ教えを説いているのです。要するに、少なくともヴェーダーンタ哲学的な脈絡において、ババが神であると言っていることには、まったく何の間違いもありません。ババが私たちも神であると思わせることにも、同じようにまったく何も間違ったところはありません。そしてこう言って話を締めくくるのです。ババはその本性を知っているが、私たちはそのことを知らないままなのだ、と。実際、それゆえ、ある帰依者たちは、ギター第4章にある有名なブランマールパナム シュローカ[食前の祈りの詩節]の精神に従ってこう言うのです。「否定する者もまた神である」と。

すると、こういう質問があるかも知れません。「そういうことならば、この長い反論にはどういった必要性があるのだ?」と。当然です。しかし大事なことはこうです。いいですか。人生は私たちがそれぞれの役割を演じる宇宙のドラマです。本当に、いたるところに神がいます。責める人も責められる人も。しかし、ヴェーダーンタ哲学では、脚本に従っている俳優のように、私たちはそれぞれの分を尽くさなければなりません。彼らに知らされていなくても、霊的な光に目覚めていない人々はアダルマ(不正義)を通すよう振る舞うでしょう。しかし、真理とは何かという手がかりを持った人々はダルマ(正義)の側で仕事をしなければなりません。『ラーマヤナ』の中のラーヴァナという古典的な例があります。ラーヴァナはよく書を読み、ラーヴァナなりに信心深

かったのですが、それでも悪の道を突き進みました。そして危機が迫ると、弟ヴィビーシャナがあえてラーヴァナに刃向かって、良い忠告を与えようとしてしました。それは、ダルマに関するものでした。『マハーバーラタ』では、何が起ころうと見上げた義務の遂行をした例、そして同様に多くの義務の不履行をした例を見ることができます。ビーシュマは、よく書をたしなむそれなりに高貴な長老でしたが、ビーシュマの言葉が大きな意味を持つことになるであろう時、またそうすべきであった大事な時に、話しそこねてしまったのです。一方、ヴィドゥラの例もあります。ドゥリタラーシュトラ(その相談相手がヴィドゥラだったのですが)にきっぱりと躊躇することなく意見を言い、黒は黒と呼んだのでした。

これらの例には意味がないわけではありません。独立後の数十年で、ゆっくりではあるが、確実に、私たちの教育機関はひどく墮落してきました。それに対し、あえて声を上げる者はいなかったのです。教育機関から価値観が崩れていくとき、その社会に何が期待できるでしょうか？ 結局、このようなことになるのです。私個人に関してですが、私は愛、平和そして地球の調和というメッセージを広めるためだけに設立された、ブラザーンティ・デジタル・スタジオ[ラジオ・サイの収録スタジオ]の一翼を担っています。十分な情報機器がないので、何百万の人々には届かないでしょうが、しかし確実に数千の人々はこの不安定な世界において慰めや安らぎを得ようと、私たちの放送に耳を傾けています。スワミへの攻撃に心を痛み、深く傷つきながらも、大勢の人たちが何かをなすべきだと手紙を書いてきました。ババが何も弁明する必要がないと言っているからといって、それを単純に無視することはできません。確かに、ババはこういうことを超越されていますが、それでも私たちには行動する義務があり、そうすることによって私たちは名誉を回復することができるのです。

『ラーマヤナ』で、ラーマがまさにランカーの町へ進軍しようとするとき、ヴィビーシャナが糾弾されラーマの前に引きずり出されました。ラーマはヴィビーシャナを排除すべきだと求められます。ラーマ神は注意深く皆の意見を聞いて言いました。「ヴィビーシャナが死刑に処されるべきだという、私を気遣うあなたがたの進言には感謝しているが、残念ながら、私はそれには賛成できない。それが、ただラーヴァナを排除するという問題であれば、あなたがたの助けも得ずにそれはできる。実際、私にはランカーを征服する必要はない。私は、アヨーディヤーそのものからそうしようと思えばできた。しかし、ある理由から、この面倒な手続きを取ってきたのだ。その一つは、ダルマのために闘うことによってあなたがた皆に名誉を回復する機会を与えること。もう一つは、私に、ある種の教えを説くという機会を与えること。三つめは、このようにしてダルマを上演することによって、私の恩寵をあなたがたに与えるという必要を満たすに十分な機会をもつためだ！

今ここで、私が説きたい教えは、だれかがあなたの所へやって来て降伏しているときに、あなたがたは単純に彼を見捨てることはできないということだ。確かにその者は邪悪な思いを抱き、そのように行動しているかも知れない。しかし、王のダルマとしては、ひとたび保護を求められた以上、無条件に与えるべきなのだ。そして、まさにそれこそが、王家に生まれた者として私がしようとしていることである」。そういった義務の精神に導かれ、そして大いなる謙虚さをもって、神のドラマの複雑さという概念をいくらかでも世界中の帰依者たちが得られるよう、また無知な人々が言っているようなことで煩わされることがないように、この長い論説文をあえて書いているという次第です。

まだ終わっていませんが、というのも、まだまだもっと言うべきことがあるからなのですが、すべてはスワミのアヴァター[神の化身]としての側面に関連しています。この話題について語り始めるに及んで、1990年

だと思いますが、スワミが初めて私と私の妻をインタビューに呼んだときに起こったことを書きたいと思いません。その数年前、私たちはたった一人の息子であった子どもを、突然、若くして失くすという悲劇にみまわれていました。息子は18歳でした。息子が突然逝ったとき、私たちの人生は閉じられてしまったのです。ハイデラバードの自宅近くにあったサイ・グループに参加して、バジャンに定期的に参加しながら、慰めを求めたのです。一つのことが次へとつながり、ババの大学の副学長、サンパト教授(Prof.Sampath)、何十年もの知己を得ているすばらしい紳士ですが、サンパト教授のおかげでプラシャーンティ・ニラヤムを訪れ、ついにスワミの所へ呼ばれたのでした。私は、夏季コースの時にすでに軽くスワミに会ってはいましたが、私の妻にとって、直に対面するのは初めてでした。ではここで、「熟考」(Musings)という私の番組の一つから、数年前にラジオ・サイで放送されたものをそのまま再現することにしましょう。

——「それ(そのインタビュー)は、神との甘い親密さが本当に何を意味するのか初めてわかるようになったときでした。そこで、スワミが私たちの息子の早すぎる死に関してあることを詳しく明かされたのですが、私は驚くべき新事実も得たのでした。私たち以外だれも知らなかったことについてでした。それから、ババは私の妻に尋ねました。『なぜ、あなたはいつも私に詰め寄るのですか?』。妻はこの言葉に驚きましたが、私もです。妻が気を取り直して言いました。『スワミ、今までに一体どうやって私があなただけに詰め寄ることができるのでしょうか? 私たちが面と向かって会うのはこれが初めてだというのに』。『いいえ、あなたがたは規則正しく私と戦っています!』。このとき、妻は黙ったままで、一方、私はたいへん当惑していました。するとババは言いました。『毎晩、皆が寝静まってから、あなたはプージャーの部屋[祈祷室]へ行き、神の前に立って問いただしているではありませんか。“神様、一体どうしてあなたは私の息子を奪ったのですか? 私があなたに一体どんな悪さをしたというのですか? それどころか、私はずっとあなたを信仰してきました。それなのにあなたは私にこのようなことをなされたのですね。あなたは本当にひどい方です、不公平です”。このようなことを来る日も来る日も言っていないでしたか?』。私はただ驚くばかりでした。その時まで、毎晩真夜中に、妻が神を問いただしているなんて思いもよりませんでした! 妻は頭を下げてそっと言いました。『そうです、スワミ、それは本当です』。スワミは微笑んで言いました。『ほらごらんなさい。私は知っているのですよ!』。スワミ独特のやり方で、スワミが全能の神であり、つねにすべてを知っているのだということを、スワミは私たちに伝えたのでした——。

ババが声高にアヴァター[神の化身]と叫ばれるとき、その背後には、たくさんの意味があるのだということをあなたがたにただ知ってもらいたいがために、私はこの話をしているのです。あなたがたは信じないかもしれませんが、でっち上げだなどといって簡単に片付けてしまう人もいます。けれども、私はかまいません。実際、でたらめを言ったり、作り話をして私に得るものは何もないのです。それに私の科学的素養はこれまで私に、信じるに足るだけの確実な証拠がない限り、努めて懐疑的であるべきだということを教えています。つまり、一般的に奇跡と呼ばれている出来事に対する疑問に対してなのですが、奇跡は、そのような超日常的な出来事にさらされたことのない人々によって、^{はいべつてき}軽蔑的に却下されています。

私は愚かにも、何年もサイ・ババのことを信じていませんでした。私も他の人たちがするように(また彼らは今でもそうし続けていますが)ババをしりぞけていました。そのころ私がババを拒否していたのは、基本的にはババの奇跡の話のせいでした。私はそれらをまったく信じていませんでした。のちに、悲劇が私たちの人生を襲うまで、ババの愛というメッセージなど考えてもみませんでした。それは完全に私が受け入れられるものでした。私は何十年もガンディーやトルストイの書物によって育てられてきたのですから。そういえば、

ガンディー自身はトルストイの影響を受けており、南アフリカの彼の農場にトルストイという名前さえ付けています。その点に関して、私は叔父とサイ・ババの奇跡について議論したのをはっきりと覚えています。物理の法則に従ってそんなことは不可能だと私が主張する一方、私の叔父はこう言って取り合いませんでした。「お前よりも偉大な科学者たちがひっくり返ったんだから、私はお前のような若造に論破されるものか！」。

それから1991年五月、正確には22日に、私は人生の衝撃を受けたのでした。私は、ババの大学で計画された夏季講習で話をするためにバンガロールへ行っていました。当時副学長だったサンパト教授に招待されたのでした。5月21日の朝、到着しました。その夜、ラジヴ・ガンディー(Rajiv Gandhi)が暗殺されたのでした。翌朝、国全体が大騒ぎでした。その日の午前予定されていた私のスピーチは中止になりました。代わりに、私はババの教えに関する個人的な話をしました。ババは、サンパト教授に同じスピーチを設けるよう依頼しながら言いました。「皆に私が出席することを告げなさい。さもなければ、そのスピーチを欠席する者が出るかもしれないから」。

午後3時に皆私のスピーチに集まりました。スワミは現れませんでした。スワミは、当時プッタパルティで建設中のスーパー・スペシャリティ・ホスピタル(高度専門病院)に関することでも忙しかつたのです。それでも、ババの場所にはいつものようにイスが一つ置かれていました。聴衆に私の紹介をする傍ら、サンパト教授は私のほうを向いてこう言いました。「ヴェンカタラーマン博士、あれはババのイスです。空っぽのように見えますが、いいですか、ババはあなたがしゃべることはすべて一言一句聞いておられます」。私はそれを真剣には受け止めませんでした。私は、大部分はガンディーの教えに基づいた価値観というものの重要性について話しをしました。

スピーチが終わると、サンパト教授は私をババの所へと連れて行きました。私は、いとまごいをして、ハイデラバード行きの飛行機に乗るために急いで空港へ行かねばなりませんでした。いたるところで大騒ぎでしたし、空港へ行けるかどうか分からない有様でした。もしたどり着けたとしても、飛行機が飛んでいるかどうかさえわかりませんでした。「あなたの話はすべて聞いていましたよ」。それは、最初のノックアウトの一撃でした。「疑り深いトーマス」ならこう言ったかもしれません。「とんでもない、それは仕組まれたもので、ババとサンパト教授の間で前もってやり取りがあったに違いない」。そういう人たちに言いたいのは、ババに対して大変不当なだけでなく、サンパト博士のように、なかなか出会えないようなすばらしい紳士に対してもひどく不当なことです。知らない方にお教えしますが、サンパト博士はスタンフォードで電子工学を学ばれ、1955年にインド科学大学で教えるためにバンガロールへやって来られました。(実際、私はここでサンパト博士に会いましたが、その時はサンパト博士のことを知りませんでした。) 後に、サンパト教授はマドラスのインド工科大学へ移りました。そこでサンパト博士は何年も副学長として働きました。教授でもあり、コンピューター科学部門の部長も兼ねていました。その後、サンパト博士は社会奉仕連合委員会で勤務し、カーンプルのインド工科大学の部長などを経ました。ここでサンパト博士の名誉の数々を思い出すには長すぎて無理があるのですが、それにしてもサンパト博士は完璧な紳士でした。ですから、今私が取り上げているような出来事の共犯者としてサンパト博士を攻め立てるのは、きわめて重い罪でありましょう。

この数分後、私は二回目のノックアウトの一撃をくらうことになりました。私はスワミにいとまごいをして、バンガロール空港へ向かう準備をしました。その時の場面をよく覚えています。私たち二人は、共にトレーラー・ブリンダー・ヴァン(ババのホワイトフィールドの住まい)のドアの近くに立っていました。スワミは、手を振って私

のためにヴィブーティを出し、手のひらに注いでくれました。それが眠りから覚めた瞬間でした。この時のショックは私の息子の突然の死、あるいはガンディーのまったく予想だにできなかった暗殺のショック以上のものでした。私は、その体験にまったく呆然としてしまいました。何分かして我に戻ったのですが、後で、それがどういう意味だったのか理解するために真剣に考えるべきだったと気がつきました。

その日に(そして後で何回も)私が目撃したヴィブーティの物質化は、私がそれまでに学んだことよりも、はるかに多くのことがあるのだということに気づかせてくれました。ソールカー氏はこのヴィブーティは単なる塩の玉で、最初隠し持っていて、それから粉々にするのだと主張しています。ソールカー氏に言わせてもらいますが、私はその時以来ヴィブーティの物質化をさまざまな場面で、あらゆる場所で百回以上は目撃しました。私はまた、いろいろなときに個人的に物質化されたヴィブーティをいただきましたし、そういった時は必ずその味をみてきました。それは、**どれほど想像力を働かせようともまったく塩の粉などではありません**。これが、私が最初に言いたいことです。

私はこれまで、きわめて予想し難い状況で物質化されたヴィブーティを見てきました。ここに一つの事例があります。1999年3月、スワミはボンベイに行ったのですが、私もその一行に加わっていました。そこで、スワミは大勢の家を訪れましたが、ある日の午後、ウォールリーにあるスニール・ガヴァスカル(Sunil Gavaskar)の家を訪れました。スワミはボンベイの有名人たちでいっぱい大きな一室に座っておられました。もちろんそうした有名人の多くはスポーツ界から、そしてある者は映画界からの人たちでした。その部屋は人で一杯でしたが、無言律によって私たち一行のメンバーは外に座っていました。最初にバジャンが歌われ、そして短いスピーチがたくさん続きました。その後、ババは軽く食事をするためのダイニング・ホールへと案内されました。人々はババに手紙を渡したりしていました。スワミがドアの近くに来ると、私にもよくスワミが見えました。そこには、私の時代のクリケットのヒーローだったポーリー・ウムリガール(Polly Umrigar)とG・S・ラムチャンド氏(G・S・Ramchand)が座っていました。ガヴァスカルが二人を紹介しているときに、スワミは、いつものように何気なく、「ヴィブーティは好きですか?」と尋ねました。二人が答えるのを待つことなく、スワミはその場で物質化しました。一体どうやってだれがそんなことを予測できたでしょう。アンデーリーからウォールリーまでの長い道のりを、車に乗って、一時間座ったままでいながら、その間ずっと指の間に塩の玉を隠し持っているなど、どうやったらできるのか私にはわかりません。おそらくソールカー氏ならばそれができるでしょう。そんな事例はいくらでもありますが、省略することにします。しかしながら、ラジオ・サイの放送のために用意したキャプテン・オベロイ(Capt.Oberoi)とのインタビューから、抜粋したものをここで披露したいと思います。知らない方たちのために申し上げますが、オベロイ氏はインド航空で最初はパイロットとして、後に広告部門で働いておられた方です。退職まで高い地位にあった方です。退職後、オベロイ氏はブッタパーティに来られましたが、ここで空港官として十年以上勤めておられました。私もオベロイ氏のことはよく知っています。

オベロイ氏が仕事でマドラスにいた時のことです。ババがハイデラバードに行く予定だと聞いて、オベロイ氏はバンガロールにやって来ました。広告部門の幹事長として、オベロイ氏は担当の地域を仕事であちこち飛び回って行くことができました。オベロイ氏は大きな問題を抱えていたので、スワミにとっても会いたがっていました。スワミはオベロイ氏に、ハイデラバードに行く予定があり、飛行機の上でオベロイ氏と話ができるだろうと告げました。そうしてオベロイ氏はハイデラバードまでの便にババと同乗したのです。そのとき、オベロイ氏は深刻な問題を抱えていました。喉頭癌と診断されていたのです。次に何が起こったのか、オベロイ氏

が思い出して語るのを聞くことにしましょう。

——「その飛行の間、スワミは私を呼んで隣に座るようにと言いました。そのとき席にいたラーダークリシュナ氏は、私が座れるようにと席を空けてくれました。私が座ると、スワミは私の健康について尋ねたので、私は、『スワミはアンタラーミ(内なる存在)であるがゆえ、私の問題をご存知です』と答えました。

私の目から涙がこぼれてきました。私は動揺していました。スワミは私の涙を拭いて言いました。『わかっています。しかし私はあなたに話してもらいたいのです。話せば負担が軽くなるでしょうから』。それで私は、ENT(耳鼻咽喉科)の専門家が私に喉頭癌であるという診断を下したことを話したのでした。

スワミはコップに水を持って来させると、黒っぽい粉のようなものを物質化しました。そして、その粉をコップに入れ、スプーンで水をかき混ぜて私に飲むように手渡してくれました。それはとても苦い味がしましたが、私は全部飲んでしまいました。スワミは指先に残っていた黒い粉を全部私の喉に擦り付けてくれました。

それはとても慰められるものでした。痛みはたちどころに消え、それ以来、手に負えなかった咳はほとんど出なくなりました。スワミはマドラスのカーメシュワール医師(Dr.Kameshwar)の所へ行って、私の病気に関してもう一度診てもらおうようにと言いました。私は、もうずい分良くなったので、なぜまたもう一度うんざりするような検査を受けなければならないのかと抗議しました。スワミはこう主張しました。『Ape Swami ka agya palan karo aur second opinion lo』(あなたのスワミの言うことを聞きなさい。そしてもう一度診てもらいなさい)」。——

オベロイ氏はマドラスへ帰り、スワミに勧められたように、高名な専門家であるカーメシュワール博士を訪ねました。カーメシュワール博士はたいして入念な検査もせずに癌と診断するような他の医師たちとは違っていました。カーメシュワール博士はオベロイ氏が持ってきた検査報告に軽く目を通すと、なぜもう一度検査を受けたいのかとオベロイ氏に尋ねました。特にそういった検査にはひどい痛みを伴うものがあるのに、と。結局のところ、最初の検査からたったの十日過ぎたばかりの、そんな短い期間に一体どんな大きな奇跡が起き得るのでしょうか？ オベロイ氏はその医師に、特にカーメシュワール博士に診てもらおうようにと言われたこと、そしてスワミの指示に従ってそうしていたことを告げたのでした。カーメシュワール博士は、しぶしぶ検査を引き受けました。検査を終え、二重に検査を受けたのですが、そこにはまったく、癌の痕跡は何も残ってはいませんでした。スワミがすでに消えてしまっていたのです。オベロイ氏は、スワミはなぜ、もともとオベロイ氏を診察した医者^のの所へ、ではなくカーメシュワール博士の所へ行かせたかったのか、と私に尋ねました。カーメシュワール博士はスワミのことを信じてはいませんでした。この出来事以来、完全に変わったのでした！ 繰り返しますが、私が今再現したキャプテン・オベロイ氏の言葉は、数年前にラジオ・サイの放送で録音されたものとまったく同じものです。

私は、キャプテン・オベロイ氏をととてもよく知っています。オベロイ氏はバジャンのととても上手な歌手ですし、素朴で率直な人柄です。ソールカー氏はまた疑わしいものだ、とおっしゃるでしょうが、どうやったら黒くて苦い塩の粉が一気に癌を治せるのかわかりません。おそらくババはオベロイ氏が問題を抱えてババのもとへやって来るのを知っていて、それで前もって黒い薬を持っていたのでしょう。

ここで再びサングヴィ氏の辛らつな言葉に関して触れなければなりません。「金持ちの帰依者はオメガを手に入れるが、貧しい者たちは神聖な灰を手にするだけだ」。そのような話をする者は単純に靈的に無知であるにすぎません。私に関して言えば、いつだってオメガの時計よりもヴィブーティの方を価値あるものだと思います。時計は役には立ちますし、確かに仕事に行くときに一つはめていきます。しかし高価なオメガは執着心を刺激しますので、私はそういったものはあえて好みません。ヴィブーティはどうでしょう。ババが説明しているように、物は燃えると灰になります。しかし、灰自身は燃えることはありません。すなわち、経典などで人が目指すべきものとして薦めている究極の精神の純粹さという状態を思い起こさせてくれるものです。ヴィブーティはこのように究極の純粹さを象徴するものなのです。

私が何と言おうと、こいつは何て無知なのだろうとか、ババに何と騙され、欺かれているのだろうとか、こいつはあまりに未熟だから手品師のトリックを見抜けないのだとか、ありとあらゆる議論がなされるのは明らかです。そこで、私の体験を語ることにしましょう。これはおよそ四年前の出来事です。三月の初め、午後ダルクシャンの時だったと思います。スワミがベランダに腰掛けていました。そこからは数千人が座っているサイ・クルワント・ホール全体が見えます。ひどく暑かったのですが、当然です、夏がすぐそこまで来ていました。一時間ほど経ってから、突然ベランダでスワミの近くに座っていた数人と会話を交わしている最中に、そこに集まった人々を全員見渡し、スワミが手を振ってイチジクの一つ出したのでした。プラスチックでもなければ粘土でもない本物のイチジクでした。スワミはそれを近くにいた私たちに渡したのです。私はそれを受け取って、手のひらに載せて見ました。それは本当に新鮮で、まるでよく効いた冷蔵庫から出してきたばかりのもののように冷えていました。どうしてそれがイチジクだとわかったかですって？ なぜなら、ババがそのイチジクを小さく切って配るようにと言ったからです。私が食べたイチジクの一切れを持っていましたから。その時そばにいた人たちがだれだったのか皆は覚えていませんが、S・V・ギリ氏(S・V・Giri)がそばにいたのは覚えています。ギリ氏は、当時、副学長でしたし、当然スワミのお手伝いをするために側にいた一人か二人の少年たちもいました。彼らもその物質化された、新鮮で冷たいイチジクを一切れもらっていました。こういったことはすべて数千人という大きな群集の前で起きたことです。これをお話するのは、ND テレビのソールカー氏が、スワミが手品師と言っているだけでなく、ババがカーテンの後ろの自分の部屋でものを物質化しているのだと主張しているからです。お決まりの説明で、そのイチジクは前もって用意されていて、袖の中に隠してあったのだと言う人もいられるかも知れません。けれど、ババはそれをどうやって冷たいままにしておくことができたのでしょうか？ もしかして袖の中によく効いた冷蔵庫を持っていたのでしょうか？

7. 物質化に関して

私はこれまで、機内での物質化も含めて、あらゆる変わった場所で、こういったことをたくさん見てきました。ババが手を怪我して右手を包帯で吊っていたとき、ババはヴィブーティ(たいていの帰依者が本当に望んでいたのはこれでした)を、左手を使って出したのです。ここで「これを何とか説明できるのか?」。私の科学的素養から察するに、あえて仮説を取ってみようと思います。物理学と超物理学を結ぶ架け橋という私の現在の観点に基づいたものです。ここ数十年、いわば物理学の最後の境界、小宇宙と大宇宙の間の架け橋である分野において目覚ましい進歩が見られました。これまでに私が書いてきた一連の書物に関連して、こういった進歩を受け入れながら、数年を過ごしてきました。(この魅惑的な視野のほんの一部ですが、H2H 中の SEARCH FOR INFINITY(無限を探して)というシリーズに載せています)。それはある意味

驚くべきことでしたし、別の意味でも完全に理解されうることでした。物理的な宇宙は、私たちには違ったふうに見える実体の間に驚異的ではあるが、とても精妙な宇宙の関連性を表している。そういうわけで、ある物理学者が言っているように、たった一つの電子があり、単に空間と時間の影響のせいで多様に見えているのだ、と。いわゆるファインマン図[素粒子間などの相互作用を表す図]の助けを借りれば、これはきれいに説明がつくことですが、そこへ話をそらすつもりはありません。70年代半ば、いわゆるアインシュタイン・ポドスキー・ローゼン逆説(EPR)と呼ばれるものを研究する過程である注目すべき実験がこの宇宙の基層を明らかにしたということをおきましょう。きわめて予想外の発見でした。実際、アインシュタインはこれを否定しました。なぜならアインシュタインは異なった実在には別々の実体があると信じていたからです。ネイチャー誌は今こう言っています。「あなたがたの感覚に応じて、そのように表れ、あなたがたの科学的道具、それはあなたがたの感覚の延長にすぎないのであるが、それに従って、そのように表れるであろう、と。しかし、そこには隠された宇宙の関連性というものがあって、その結果すべてのものは一つになるのである。それゆえ、特殊相対性理論の明らかな侵害があるのだ！」と。

私の考えでは、これはすばらしい発見です。それについて深く考えたある人々は、我々の過去のリシ[聖賢]たちが語ってきたように、アートマを通して、宇宙の相互関連性という直観的概念を自然は実際に証明しているということに気がついたのでした。

ここでまた別の疑問が生じます。「宇宙には始まりがあった。我々はおよそ137億年前にこの宇宙が生まれたと信じている。それなら一体それはどこから来たのか？ この宇宙の元々のエネルギー庫はどこにあったのか？」。これに関して科学界にはたくさんの推測がなされています。しかし、ギーターの言葉を借りて、あえてこう示唆したいと思います。我々の宇宙を定義している時空間を超えたところに、私たちのこの宇宙を生まれせしめた「見えない何者か」が存在しているのだと。我々の宇宙に「母なるもの」が存在したということは、今や多くの宇宙学者が受け入れていることです。私なりに、その「母なるもの」はヴェーダーンタ哲学で強く提唱されている宇宙意識であると考えています。

これが単なる推測にすぎないことは認めますが、それでもかなり妥当な考えであると思います。宇宙意識という概念を、成りたてで、未熟な最近の科学者たちがよくやるように、簡単に排除してしまうことはできないでしょう。現代の多くの物理学者たちが最近になって物質の実体は、実際に純粹宇宙意識から生まれ出たのだという結論にしぶしぶ達したのです。この宇宙というものに関しては、初期の量子電磁力学において多くの洞察を与えたすばらしい物理学者であるフリーマン・ダイソン(Freeman Dyson)のような人物がまさに、**Review of Modern Physics**[現代物理学論評]という権威ある機関紙に、血肉をまとわない生命体に関する真摯な論文を発表するという事をやってのけたのでした。ダイソンはこう推測しています。たとえ地球という惑星がよく知られているように、生命にとって生存しにくい星になったとしても、宇宙意識の一つの雲のような、この宇宙において、生命はある原始的な形で存在し得るだろうと。これらの深遠な研究はダイソンが名誉あるマッカーサー特別会員奨励金を受けていたときに出されたものです。

私が言おうとしていることはこれです。1)我々の宇宙は宇宙意識から生まれた。2)宇宙全体に浸透している宇宙意識という背景の下に、我々の宇宙は進化してきた。3)この宇宙意識は、我々の宇宙にあるすべての原子に内在している。人間という最も豊かな形態においてきわめて明白なように。

この長い脱線がどうしても必要だったのかは、以下の理由からです。まず、次のことを指摘しましょう。シュリ・オーロビンドー(Sri Aurobindo)によると、純粹意識のエネルギーは我々の宇宙を造り上げているエネルギーへと数多くの段階を経て幾筋にも細かく分かれて流れている。これは興味深い考えです。ヴェーダーンタは、純粹意識の抽象的な領域にまでさかのぼります。その下位のどこかしらに、我々が占有している物理的な宇宙があるというわけです。(いずれにせよ)エネルギーは「抽象的な階層を超えたレベル」から降りてきて私たちの階層の「レベル」を造っているのです。にもかかわらず、純粹意識は私たちの宇宙にも浸透しており、(今となっては捨て去られた)古典的な学説であるエーテルという概念のように、いたるところに存在しているのです。アインシュタイン・ポドスキー・ローゼン逆説を調べるために行われた実験における、この量子連結性の発見は、私が主張するように、純粹意識ともいえる、物理的な宇宙全体に流れている微妙な関連性が事実存在するという事をかなりの自信を持って言えることになるでしょう。

話はここで終わったわけではありません。およそ二十年くらい前のことでした。ロバート・ジャーン(Robert Jahn)というプリンストン大学の航空科学の教授が、運動錯誤における実験を行っていたある学生の世話をしよう頼まれたときのことです。その学生のガイドが休暇に出ていたためでした。この学生の実験には心(マインド)と物質間の相互作用の研究が含まれていました。ジャーンは個人的にはそのような現象を信じてはいませんが、同僚の教授に対する礼儀から、引き受けたのでした。基本的にジャーンはその実験の電子工学の分野と統計学的な側面を見てあげることになっていました。結果、次第に、ジャーンはこの研究にひきつけられていき、ジャーン自身完全にそれにのめり込んでしまったのでした。ジャーンは奇妙な発見をしました。基本的に心(マインド)が物質に影響を与えることができるということです。(これが何を意味するのか後で述べるつもりです)最初、ジャーンは自分が発見したことを信じませんでした。それで、管理をどんどん強めていったのでした。しかし、心(マインド)が物質に影響を与えるという結果は出続けました。ジャーンは、人間の中の見えない宇宙意識というものが自動力のない機械に影響を与えうるという結論に達したのでした。なぜならば受動的ではあっても、機械にもまた宇宙意識が浸透しているからなのです。このことはジャーンに、量子電気力学と量子クロモ力学の基礎をなしている学問というような分野で、宇宙意識の数学的学説を書かせることになったのでした。ジャーンの数学的な公式の詳細に賛成かどうかは、はっきりわかりませんが、しかしジャーンの基本前提に関しては、それがどんなものであろうと疑う余地はありません。

ところでジャーンは、アメリカの電気、電子工学協会でも出版されている、権威ある雑誌 IEEE で心(マインド)と機械の相互作用に関する発見に関して執筆しました。それは専門家たちによる最高の評論雑誌で、そこで発表するとなると、その論説にはかなりの学識が必要とされるでしょう。事実、ジャーンの発見は広く受け入れられてはいません。しかし、前もってヴェーダーンタや宇宙の起源といったものに関する知識が何もなくても、ジャーンは現実には、精神が物質と相互に作用するという可能性を明らかにしたのです。

では、ジャーンは一体何をしたのでしょうか？ ジャーンは、次のような実験(おそらく最も人を動かさずにはおかない)をたくさん試みました。この実験でジャーンは Random Number Generator(RNG、任意の数字生成器)という電気機器を使いました。自動的に、機械が任意の数字を出し続けるというものでした。その数字が純粹に任意に出されたものであるかどうか非常に正確なテストが行われました。ジャーンは有志者たちをその機械の前に何時間も座らせて、心の中で、「機械よ、お願いだから任意の配分からはずれてくれ」と言い聞かせながら、機械に集中させました。見たところ、そんな実験は狂気じみでいて、まったく時間の無駄と思われるかもしれません。ジャーン自身そんな気持ちで始めました。しかし、ジャーンは自分に言い聞かせ

ました。「結果について先入観を持たないようにしよう。これから何が出てくるのか何も予測しないで、ただやってみよう」。そしてその結果、ジャーンは人々が実際に機械に影響を与えているといことを発見したのです。当然ジャーンは最初そんなこと信じませんでした。何度も繰り返し行った結果、そこに何かが存在しているという結論に達したのです。その時ジャーンは、前述の宇宙意識の領域によって影響を受けている、心(マインド)と物質間の相互作用という理論を積極的に発展させていく事を始めたのです。

私が本当に言いたいのは単純にこういうことです。もし、自然が宇宙の誕生のときに、宇宙意識から物質を生み出したのであれば、特にジャーンの実験にあるように、人は純粋な宇宙意識に直接かかわって、事象を物質化し得るのであり、また実際にいろいろな事象を起こさしめるであろうと。質問。「皆、だれでもこの純粋な宇宙意識にかかわって、いわゆる『奇跡』と呼ばれるものを起こすことができるのか?」。答えは、だれでもができるわけではなく、純粋意識の領域に住まうことができるよう修練を積んだ女性、または男性に可能なことです。ヴェーダーンタでは、そのような力をシッディとしてはっきり定義していますし、実際それには多くのタイプがあります。またヴェーダーンタでは、真の求道者は究極の原理を追求する際、容易に人を逸脱させてしまうようなシッディの力によって気をそらされたり惑わされたりすべきではないと忠告を与えています。

私の考えでは、ソールカー氏が安っぽいトリックと呼んでいるものは、歴史を通して知られているシッディの力が表れたものです。ババは「純粋な人が意図すれば、単純にそれは起こる」と言います。歴史は、イエスは多くの奇跡を行ったと記録しています。そのことに何の驚きも感じません。多くの神秘主義者は奇跡を行ったと言われています。もう一度言いますが、きわめて可能なことなのです。意図し、その意図を現実のものとしたり、実現させる能力は単純に**その人の精神の純粋性**によるものです。それは宗教とは**何の関係もありません**。すなわち、奇跡と呼ばれる行為を行っているあらゆる信仰には、聖者や預言者の物語があるということです。私がこういう念入りな脱線をするのは、ただこのことを伝えるためです。

以前は強固に奇跡というものを信じていませんでしたが、ひとたびそれを目にした以上、しかもさまざまな状況の下で、それらを全部詳しく語るだけの時間と場所があればと願っていました！ 説明がつくようになったのです。宇宙意識に基づいた妥当な筋書、私に証明はできないが、否定もできないというシナリオに行き着くまでに数年かかりました。この地球上の生命の起源に関するすべての理論はその**範疇**に入ることでしょう。同様に、我々のこの宇宙がどこから来たのかという理論はすべて、依然として少数の有力な可能性とともに推測の枠を超えていません。宇宙の場合と同じように、精神の力による物質の直接的な創造も含め、並外れた出来事は不可能ではないと言わざるをえないのです。彼らには可能であり、ある状況下では本当に起こるのです。奇跡を可能にするシナリオがいろいろあるということを推測することはできますが、それくらいでやめておきましょう。私たちは決して**真実全体**を知ることができないかもしれません。実際この宇宙では、(奇跡も含めて)つねに我々が**完全に知り得ないもの**がたくさんあるのです。そういえば、よくあることですが、偽者たちが人々を**騙す**ことはできます。しかしだからといって皆が皆偽者というわけではありません。人は合理的な存在だと信じ、最初から確信を持つような罠に陥るのは危険なことです。

今実践したように、合理性、道理にかなった行動は空間と時間の中にあります。そうです。私たち普通の生命は空間と時間の制約を受けています。しかしそういう理由で超自然的で卓越した経験をまったく馬鹿げていると決め付けてしまって良いのでしょうか？ アインシュタインは科学を追求した結果、宇宙崇拝という感情を持つに至ったと宣言しました。アインシュタインは馬鹿げたことを言っているのでしょうか？ アインシュタ

インは頭が変なのでしょうか？ それならば、私は偽ジャーナリズムではなく同じ馬鹿げた職業を選んで、幸せだと言わせてもらいましょう！

宇宙崇拝の体験と言えば、アインシュタインが、ウパニシャッドが至高の存在について述べているのと驚くほど類似した言葉で、それは言葉と精神(マインド)を超えた体験であると語っていることを、再び思い出していただきたい。わが国のヴェーダの預言者もまた瞑想を通じたトランス状態に入ることによってこれを追求したのです。ラーマクリシュナもラーマナ・マハーリシも皆、宇宙意識の状態であるこの至高の至福を体験したのです。ヴェーダーンタでは、この絶対実在の状態を別の名前でブラフマンと言います。ヴェーダーンタはさらに、自分自身の中に入ることによって人は最終的に内なるブラフマンを発見するのだと主張します。このように内なる「神」は外なる「神」と同じものです。アートマンはブラフマンであるという言葉に表れた真理です。ヴェーダーンタを深く探求した、小説家シュローデインガー(Schrodinger)はまさにこの結論に達したのです。聖典の中でニラーカラ・ブラフマン[無形の神]と述べられているように、プールナ・アヴァター[完全なる神の化身、クリシュナ神とサイ・ババ]は抽象的で形のない神が人の形をとって現れたものである、という事実をしっかりと把握するために、私はそれに特別な注意を払っているのです。この対照的に、血と肉をまとった姿のアヴァター[神の化身]はサーカラ・ブラフマン[有形の神]とされています。そしてクリシュナ神は、はっきりと神は必要なときは降臨し、本当に人の姿を取るのだと言っています。

ここで少しでもこれらのことをすべて肝に銘じて、考えてみると、次のことを見るのは少しも難しいことではありません。

1. すべてはアートマンの側面である。ところで、これはまさにクリシュナ神がアルジュナに教えた最初のことである。
2. アヴァター[神の化身]とはアートマンが肉体化したきわめて特殊な形である。
3. 人が自己の浄化、バクティ[信愛]などによって、自己を神性のレベルにまで高めていこうとするとき、神のアヴァター[神の化身]はまさにこの方法を人々に教えるために降りて来て、人々の努力を促す。実際クリシュナ神はこれをはっきりと認めた。
4. 神は人が神のレベルまで上って行けるように、人として降りて来る。このドラマにおいて、化身はちょうど冷たい雨が上から降ってくるように、純粋で新鮮な水のようなものである。一方進化する魂は、不純物を後に残しながら、地表から蒸発しながら上へ上がって行く水のようなものである。それが、たとえばクリシュナ神のような化身と、進化向上を目指すラーマナ・マハーリシのような帰依者との間にある違いである。
5. ところで、1926年にシュリ・サティア・サイの姿をとって神が降臨したことを認めたシュリ・オーロビンドは、その影響に対して簡単な言葉を述べ、その後、それを実質的に撤回した。

以上のすべてを要約すると次のようになります。

1. サティア・サイ・ババの帰依者はババが本当のアヴァター[神の化身]であると心から信じている。
2. たとえばクリシュナ神がそうしたように、アヴァターはさまざまな力にあふれた存在としてやって来るのであり、ババの行為が奇跡的だからといってそれはまったく取るに足らないものです。
3. しかしながら、普通の人々がこれらの奇跡に驚異の念に打たれる一方、ババ自身は、それはババの愛の表現にすぎないと言っている。

4. 皆が皆、ババがアヴァターであると信じる必要はない。しかし、信じないからといって彼らが根拠のない中傷を支持したり、ババの社会的な任務に対し悪口を言う権利が与えられるわけではなく、しかも基本的な事実をよく知ろうともしないことが認められるわけではない。礼儀をわきまえた人ならだれでも、この国の貧しく、恵まれない人々に、ババがやってきたような健康や飲み水といった面で、これ程多くのことをなした私的な慈善団体はないということを認めるであろう。

クリシュナ神の人生を深く分析し、入念に調べるまで、長い間私はババが善良な聖人以上のものであるとは認めてはいなかった。私はまたババによって書かれたいろいろな書物を注意深く研究し、ババの昔の講話の数々の記録を読み、私が会ったたくさんの人々から話を聞きました。それに加えて、「バガヴァッド・ギーター」、ウパニシャッドの断片を少し、ヴィヴェーカナンダの書物、ラーマクリシュナ、ラーマナ・マハーリシなどといった人たちの教えを研究しました。その時私はサティア・サイ・ババは、その外観ではなく、単なる形を超えた広がりにおいてかなり特殊な存在であることに気がついたのです。敬虔なイスラム教徒である、パキスタンの有名な物理学者、アブダス・サラム氏 (Abdus Salam) はかつて、サラム氏ほどの科学者がいかにして神の存在を信じるのかを尋ねられたことがあります。サラム氏は簡単に答えました。「何の矛盾もありません。科学を通して私は外界を理解しようとしていました。神様に関する限り、私は内側を探求しました。何が問題なのでしょう？」。

先に指摘しましたが、ガンディーは、心を支配し変容せしめるものが神であると言っています。それはまさにババが私になされたことです。私にはババを神として受け入れるにはそれで十分でした。もしその基準がガンディーにとって十分なものであったとしても、私にはそれで十分でした。私は数多くの変容を見てきましたが、それらの出来事はあまり知られてはいません。シュリ・サティア・サイ・オーガニゼーションの会長が最近、私にこう言ったのです。会長が最近オーガニゼーションの仕事でチャッティスガフに行ったとき、そこで売り上げ税務官として雇われていた一人の男に会いました。この男が会長に言ったのは、男がサイ・ババに出会う前は自由に賄賂を受け取っていたし、また実際要求もしていたということでした。しかし、今やサイの愛がこの人を永遠に変えてしまったということです。数え切れないほど多くの物語があり、それらは少しも新しい話ではありません。心から帰依する人々にとって、そのような変容はつねに世界中で起きてきたことです。結局、そこには唯一の神がいて、私たちは皆神の子どもなのです。

8. 神性という魅力

人の姿をした神について一つには、その引き付ける力です。普通のあり方をはるかに超えて表れます。私の個人的な体験から、ある出来事に関する個人的な思い出があります。それは2004年のことだったと思います。それは確かに同盟国によるイラク侵攻の後でした。どうやって私が知ったかですって。読み続けてください、そうすればわかります。

それは夏、スワミが布林ダーヴァンにいたときのことで、たまたま私もそこに居合わせたときのことでした。ある日、だれかが私に、「ここにイラクから一人の男が来ている、あなたはその男に会うべきだ」と言いました。私は興奮しました。イラクから来た男性、しかもこの時期に。何としても彼に会わなければと思いました。それでこの男性のために、ある日の午後、スワミの住まい(トレー)に隣接したゲストハウスで彼に会う手はずを

整えました。我々のスタジオ(プラシャーンティ・デジタル・スタジオ)でカメラを担当しているサイ・プラカーシュがそこにいたので、カメラを持ってくるように頼みました。

その男性は、指定された時刻に妻を伴って現れました。私は彼が奥さんと一緒だとは知りませんでした。私たちが話し始めると、サイ・プラカーシュがカメラを回し始めました。その話は驚くべきものでしたが、まったく意外というものではありませんでした。このフィルムのカットをサンスクールテレビで流したことがあります。今でもサイキャストで見る事ができると思います。けれども、とにかくここでこの男性の話を簡単に紹介することにしましょう。

彼の名前はスレイマン・ダーウッド(Suleiman Dawood)といって、もし私の記憶が正しければ、70代だったと思います。スレイマンはバグダッドの監察官という、重要で力のある地位にいました。サダム・フセインが大統領になってから、スレイマンに良心に反するようなあることを命令したのです。スレイマンは拒否しました。職を辞して、夫人と一緒に国外へ逃げたのでした。スレイマンは最初トルコへ行き、そこで仕事について何年も過ごしました。その後ブルガリアへ行き、また仕事に就きました。サダムが退けられたのち、スレイマンと夫人は母国へと帰って来ました。アメリカ人たちはスレイマンにバグダッドの警察を率いるよう要請しましたが、しかしもう一度スレイマンは拒否しました。スレイマンが言うには、征服者に仕えたくなかったというのです。今彼には十分なお金があり、働かなくてもよかったです。しかし、いたるところで悲惨な有り様や痛みを見ていたので、とても幸せとは言えませんでした。スレイマンは悩み苦しみ、つねにアッラーに祈っていました。

ある日、スレイマンに「インドへ行きなさい」という声が聞こえて来ました。スレイマンは驚きましたが、これは単なる想像だと振り払いました。しかしその声は何日も、何度も続いたのでした。スレイマンはインドへ行く決意をしました。そのことを妻に言うと、夫人は夫は気が狂ったと思ったのでした。夫人は、「インドのどこへ行くの？」と尋ねました。「わからない」。「わからないってどういうことなの？ インドでだれに会うつもりなの？」「わからないんだよ」。「どこへ行くか知りもしないで、だれに会うかもわからずに、ただインドに行きたいってことなの！」「その通りだよ！」「どうして行きたいの？」「どうしてって、聖なる人が私を呼んでいるからだよ。それだけだ！」。

さて、どこのまともな女性がそんなことを受け入れるでしょうか？ そのとき、話の途中で夫人が遮って言いました。「私は夫について行く決心をしました。信仰心とかからではなく、夫は頭が変になったのだからだれかそばにいて、必要なときに助けがいると思ったのです」。こうして二人は文字通り未知の世界へと旅立ったのでした。その時の状況を想像してみてください。アメリカがイラクを征服したとはいえ、危険な状況でした。バグダッド空港は閉鎖されていました。どこへ行く便もなく、唯一、軍関係の飛行機だけでした。そこでダーウッドは地上を旅することにしました。まず、イランとの国境へ行き、そこからイランとパキスタンの国境へ、そしてスレイマンにとって未知の、インドへと入ることにしたのです。とにかくスレイマンは旅に出ました。何かスレイマンをつき動かしていたのです。スレイマンは列車に乗り、バスやタクシーに乗って旅をしました。

スレイマンがその驚くべき話をしている間、夫人はずっと祈り続けていました。バグダッドを出て18日かそこいらが過ぎたころ、インドのワーガー国境へとやって来た夫妻はアムリツァル市にやって来ました。そこでだれかに「聖者は南インドにしかいないよ」と言われ、夫妻はデリーへ行きました。ニューデリー鉄道駅で、ス

レイマンはどこへ行くべきなのか探そうとしました。だれかが、「プッタパルティへ行ったら。だけどそのためにはまずダルマヴァラムへ行かなきゃね」と言いました。それでスレイマンはダルマヴァラムへ行くために、何がしかの列車の切符を買おうとしました。しかし、カウンターの子はその切符をスレイマンに渡さなかったのです。代わりに、彼女は、「あなたは聖なる地だからプッタパルティに行きたいのでしょうか。ダルマヴァラムじゃなくて。プッタパルティに行く列車に乗せてあげるわ」と言うと、プッタパルティ経由でバンガロール行きの切符を二枚くれました。

一日かそこいらで、夫妻はプッタパルティ駅に着きました。バグダッドからここまでやって来るのに23日かかったのです。出発したときは、夫妻はどこへ行こうとしているのかもわかりませんでした。では、今はわかっているのでしょうか。その答えは、すぐにやって来ました。スレイマンが振り返って、駅にある、スワミが微笑んでいる大きな写真を見たときです。スレイマンは興奮して妻にこう言ったのです。「我々は正しい所に来たんだよ。あそこを見てごらん。あれが私を呼んでいる聖なる人なんだよ！」。

スレイマンはアシュラムへ行きましたが、スワミはそこではなく布林ダーヴァンにいわれました。しかし、がっかりする必要はありませんでした。ドイツ人の帰依者がちょうど布林ダーヴァンへ行くところだからと、そのイラク人夫妻を連れて行ってくれる約束をしてくれていたのです。私がこの人たちに会ったとき、夫妻はすでに一週間ほど布林ダーヴァンで過ごしており、とても幸せそうでした。バガヴァンのことをババ・スワミと言いつづけていたこの男の顔には喜びがあふれていました。スレイマンは、自分がとても心配しているイラクの人々のためにバガヴァンの祝福をととても強く願っていたのです。

以上は私の驚くべき体験の平凡な記述です。戦争に切り裂かれた国から、説明はできないけれども、自分を引き付ける何者かの所へと、未知のしかし力強く、抗し難い力によって導かれた男の物語です。それは、さまざまに違った方法で、絶えず切望している者、祝福された者に訪れる呼び声の一例です。それは内に潜む神性への、「外なる」神性からの呼び声です。それよりずっと以前のジェームズ・シンクレア (James Sinclair) の場合もそうだったように、ここでは、「外なる神」はスワミでした。(皆さん、その話はご存知だと思いますのでここで繰り返すのはやめておきましょう。)

9. 神の恩寵と中止されたカルマ

これらは驚くべき出来事です。あまり知られていませんが、信じていない人々にはたちどころに、せいぜいでっ上げや錯覚として片付けられてしまうものです。それは予測されるべきことです。アヴァター〔神の化身〕であるという私自身の体験はこういうものです。スワミはよく試験官の役を演じられます。スワミはテストをして私たちがテストに合格するか失敗するかを見られます。スワミはこう言います。大工が絵を吊るそうと壁に釘を打つとき、まずその釘がちゃんと固定しているか見るために、揺さぶってみます。もしそうでないときは、もっと叩きます。はっきりと確かなときにだけ、絵を掛けるのです。スワミは絵を守るためにそういったテストをするのです。同じように神の恩寵もそれがふさわしい時にだけ、与えられるのです。

ここが大事なポイントであり、それは簡単に理解されるものではありません。私もこの手の、数えられないくらいの疑問に直面したことがあります。「神様は不合理だ。神様はなぜこんなこと、あんなことをするのだから

う？」と言った具合に。いつも私たちは神を測るようなテストをもくろんでいます。神様もまた我々をテストしているとは気付かずに！ 昔、私たちには恩寵マークと呼ばれるシステムがありました。そのシステムが今でもあるかどうかわかりませんが、そのやり方は次のようなものです。たとえば、合格点を100点中35点とします。その試験を受ける資格のある人は100点中34点取ったとしましょう。文書の上では、この候補者はその科目に失敗したということになります。しかし、これは一つ重要な事実を無視しています。それは主観的な評価がなされたならば、一点のミスの余地があるということです。科学では、我々はこれを実験上のミスと呼んでいます。あらゆる観測にはそのようなミスがつきものです。実験者がある結論を引き出したとき、同時に彼は正確な値を出さざるをえません。試験の場合、点数配分をする際、恵みの評価を与える力を有力な権威者に持たせて、一点のミスがあり得るという事実を考慮に入れるのです。このように、ある副学長は35点ではなく34点をとった少年にもう一点足してあげることがあるのです。こうして少年の運命は失敗から合格へと変わったのです。実に途方もない違いです。

神様もまたそのようなシステムに倣うことがあるということです。人々は、それが何であるか基本的なことも知らずに、中止されたカルマのことを語ります。カルマの法則を定めた神はそれが自動的に適用されるようにしています。神はめったに介入しません。しかしながらそこには二つの例外があります。例外1——当事者が過去の悪い行いをほとんど全部つづなってしまう、ほんの少しのカルマが残っているだけになったとき、ちょうど銀行がときどき貸し付け金額を帳消しにしてくれるように、神はカルマを帳消しにしてくれることがあります。豊かな国々は最近、借りたお金を支払うことができない、多くの貧しいアフリカの国々に対してこれを行いました。先ほど私が述べた ND テレビ番組で、一人の婦人が怒ってこう主張していました。「私はサイ・ババがインタビューをしたときに、その部屋にいました。重い病気の人が二人いました。ババは二人を無視すると、代わりにアメリカの大使のために指輪を出したのです。まるでその外交官がひどく指輪を欲しがっていたかのように、です」。これは、それがまったく逆だということを感じくのではなく、神に判断を下そうとする我々の古典的なケースです。

例外1はこれまでにしましょう。では**例外2**とは何でしょう？ それはずっと昔に明らかにされており、ギターの中にはっきりと記録されています。誹謗中傷する人たちが見たいと言うのであれば、ギターのちょうど真ん中あたりです。正確には第9章で、クリシュナ神が、もし人がつねに神を思うならば、神はその者の面倒を見るのだと永遠の約束をしています。続けて、最後の章で神はまた別の強調的な確約もします。そこで神は言います。もしも人が無条件にそして完全に全託するのであれば、その時、神はその人に完全な保護を与えるであろうと。

実際の言葉でこれが意味しているのは、アヴァター[神の化身]は必ずしもどんな場合にもカルマを帳消しにしなければならないわけではないということです。ある人々が考えているように、それは神の義務ではありません。帳消しにもある配慮が働いて決められるのです。こういったことに関する無知があらゆる疑念を招くこととなります。何年も前に、ある日の午後、私自身、二人の人がインタビュールームから車椅子で出てきたのを見たことがあります。スワミはその一人に、皆の前で立って歩くように言いました。そして事実その人はそうしたのです。しかし、もう一人の男性は車椅子に座ったままでした。私は驚き、哀れに思いました。次の朝このもう一人はインタビューに呼ばれました。私は「ああ、この人の番がやっと今朝来たんだ」と独り言を言いました。しかし何ということでしょう。彼は歩くことはなかったのです。彼は依然として車椅子のままでしたが、しかし彼の帰依心は少しも委^なえることはありませんでした。祈りを捧げる人々に対してスワミはこう言ったこと

があります。「私は治してあげることができます。しかしカルマは消し去ることができません。ただ、その苦しみが次の人生にまで延長されるだけなのです。あなたはそうしてその荷物を先に持ち越したいですか？ それともそれを金輪際取り除いてしまいたいですか？」。つまり、このカルマの帳消しは単純なことではなく、そのことに何の深い知識も持たない人々が馬鹿げたことを言うのは何も驚くべきことではありません。

ここまでお話したのでですから、さらにもう一つお話しておくべきでしょう。ある重い癌患者の場合ですが、スワミは患者たちに痛みで苦しむことはない^{がん}と意志されたことがあります。私の妻は癌で亡くなりましたが、妻は、癌患者が最後の段階でよく受ける、耐え難い痛み^{がん}に苦しむことはありませんでした。妻の兄は、腫瘍学者でしたが、たまたま妻の最初の乳癌の発病を診察したのです。最後の段階「最初の手術から7年後にやって来たのですが」のために、私にたくさんのモルヒネの錠剤を送ってきました。しかしそれらはまったく使われることはなかったのです。スワミは妻の面倒をよく見てくださいました。妻が死んだとき、私は葬儀に関して何もすることはありませんでした。すべてスワミが面倒を見てくれたのです。最後の最後まで詳細にわたって。スワミは葬儀ですっとバジャンを歌ってくれる、たくさんの婦人たちに出席するよう手配までしてくれました。死に先立って、スワミは個人的に妻を病院に訪れ、妻のためにヴィブーティを出してくれましたが、それをほんの少し妻の口に入れてくれました。スワミの側において、何らかの形で尽くしてくれた多くの人々に対して、スワミは何度もそうしてくれました。要するに、ふさわしいと思われるとき、スワミは少しお返しをしてくれるのです。

カルマについては、何年も前に学生たちに、ババご自身が語って聞かせた話を一つ語っておくべきでしょう。それは学生たちとの個人的な会合の場で、我々年長者も数名参加していました。私も、その時副学長だったのでそこにいました。スワミは以前、当時のキャンティーンの世話をする人がいたと言いました。この男はスワミを熱烈に愛していましたが、他の人たちにはかなり意地の悪い人でした。男は何度も親切にするようにと注意されていましたが、その男の性質、すなわちグナが男を支配していました。晩年男は重い病気になりましたが、だれも男を助けようとはしませんでした。男は排泄物の中に横たわるようにまじりました。垢にまみれた男の身体から悪臭が立ち始めていました。するとスワミは男の所へ行き、きれいに洗ってあげると、男に付き添ったのです。男は泣きました。「スワミ、私は、あれほどあなたに尽くしたのに、こんな風に私の人生は終わるのですか？」。ババは答えました。「あなたは私には愛を示してくれました。だからこうして私は来ました。でも、私は何度もあなたに他の人たちにひどい扱いをしないようにと注意してきました。なのに、あなたは一度も私の言ったことに注意を払おうとはしませんでした。あなたのカルマが地獄からしつこく跡をつけねらっているのに、私に何ができるというのでしょうか？」。

読者の皆さん。ヴェーダーンタをあまり知らない人たち、そしてここそこから一言二言を拾ってくるだけのよ
うな人たちは、馬鹿げたことだと言ってもよいでしょう。私たちも彼らの人たちを無視することもできます。しかし、あなたがたが、この冒すべからずカルマの法則がどんな風に働くのか少しでも知り得たらと、こうやってお話している次第です。この礼儀知らずの男の話はもう一つ、たくさんの人があげる要点を思い出させてくれます。彼らは言います。「いいですか。ババはいつも愛について語りますが、だけどごらんない。ここではたくさんの人が無作法に話をしています。これは矛盾ではないのですか？」。こういった類の話は少しも新しいことではなく、実際昔は定期的に、直接スワミご自身に伝えられていました。スワミはよくユーモラスな言葉で笑ってやり過ぎていらっしゃいましたが、折に触れてなぜそういったことが起こるのかと、正確に説明してくださったものです。「このアシュラムは外の世界の一部分にすぎません。人々は外からやって来ます。ある

人々はほんのしばらくいるだけで帰って行きます。またある人たちは役に立ちたいとここに滞在します。より良い方向へと変わるのは自分次第なのです。怒りっぽいといったことも含めて、望ましくない習慣に執着したままにいたいならば、自分のカルマに負担を増やしていつているだけのことです。人は決してそれから逃れることはできません。私は人々に向上しなさいと強く言いますが、人々の属性、グナは人々をしっかりとつかまえています。人は、自身のグナ(性質)を克服するために懸命に努力しなければなりません。これがギーターの教えです。でもだれがそんなこと気に留めるでしょうか？」。

アシュラムに対する不満は何も目新しいことではありません。だれかも同じ質問をラーマナ・マハーリシにしました。ラーマナはこう答えました。「あなたはここへ自分自身を高めるために来たのですか？ それともアシュラムを良くするために来たのですか？ このアシュラムは外の世界の縮図です。あなたがここで自分自身を高めるようになれば、そのときは世間に出て行っても、良いままでいられるでしょう。それはまたあなたの周囲の環境を良くすることにもなるのです！」。信じてください。これは本当に真実です。これを証明するたくさんの人々と、私はこれまで語り合ってきました。ジーヴァナンダム博士(Dr.Jeevanandam)はシカゴ大学で働いている有名な外科医です。ジーヴァナンダム博士は約300件の心臓移植手術を行ってきました。あなたがたの中にはラジオ・サイで私たちが放送したとジーヴァナンダム博士のインタビューを聞いたことがあるかも知れません。ジーヴァナンダム博士は以前こう言っていました。ジーヴァナンダム博士はずっと、ひどく辛抱のない人間だったのですが、スワミの所へやってきて、忍耐を学んだのです。同じように私自身も、たくさんの方の大事な面で助けられてきたと言えます。私は確かに完全ではありません。けれど、まったくスワミのおかげで、以前と比べて今は、望ましくない性癖という荷物を減らすことができたと心から信じています。

スワミの学生たちほどこの変容が際立っているのは他にありません。いかに多くの学生たちが、どれほどすばらしく変容して、外界へと出て行き、良いお手本を示していることでしょうか。私はサミール・バティア(Samir Bhatia、当時は HDFC 銀行の、そして現在はインドのバークレイズ銀行を率いている人物)がこう言うのを聞いたことがあります。ジーヴァナンダム博士がスワミの学生たちを大勢 HDFC 銀行に受け入れたあと、会社の雰囲気、そうした卒業生たちがある変化をもたらしていることに気がついたのです。週末、他の社員たちがパーティに集まるとき、私たちの卒業生は姿を消していました。あとでわかったのですが、彼らは近くの村々へ行き、ささやかな奉仕をしていたのです。この考えに引き付けられて、他の人たちも徐々に加わるようになり、やがて銀行そのものがいくつかの村を、発展のために管理するようになったのです。この話はいろいろな所で繰り返し語られています。

10. 津波を食い止める

さきほどあげた ND テレビ番組で、スワミ・アグニヴェーシュはサイ・ババがもし神であるなら、ババは津波を止めるべきだったと言いました。スワミ・アグニヴェーシュはまた、なぜサイ・ババは腐敗に関して何もしないのかと尋ねました。これに二つのレベルでお答えしたいと思います。まず、津波について、そして二番目に(腐敗の素である)邪悪に関して、です。

津波に関しては、スワミは何度も何度も明言してきましたが、アヴァター[神の化身]はめったに自然現象に介入しません。地域的なものは別ですが、クリシュナ神はこれを行いました、70年代初期のプッタパル

ティを襲った大洪水に関して、ちょっとは知られているのですがスワミもこれを行ったのです。この詳細記事は、以前 H2H に載せたことがありますので、ここで繰り返すつもりはありません。しかし、次のことを付け加えたいと思います。クリシュナ神はアビマニューを救えたかもしれませんが、そうしなかった。ウパ・パーンダヴァー族はすべてアシュヴァッタマに殺されてしまいました。けれど、クリシュナはそれを止めるために何もしなかったのです。そうできたかもしれないのに、です。物事の大きな計画の下に、ときおり、ある出来事が起こるのです。

短い時間の尺度では、私たちはその意味を知ることはできませんが、ときおり、大きなスケールで、何らかの神の計画が明らかになることがあります。神の子と呼ばれたイエスの場合を例にとってみましょう。神はイエスを救えなかったのでしょうか？ もちろん救えたはずですが、それならば一体なぜ神はそうしなかったのでしょうか？ なぜなら、磔^{はりつけ}の上で自らを犠牲にすることによって、イエスはその後の、世界がイエスの教えをもっとも必要としたとき、何百万もの人々のための標^{しるべ}となったのです。繰り返し、そこには隠された相乗効果がありますが、私たちにはそれがわかりません。しかもそうできないので、私たちはあらゆる種類の結論に飛びつきます。ところで記録として、一流の専門科学誌、Geophysical Letters[地球物理学通信]に発表されて明らかになった、現在プリンストンの科学者シュリ・ランカンによる研究をお話ししてもいいですか。スリランカのある沿岸地域では、さんご礁^{せっぽう}が石膏を採るために、とか観光客に売るために、と破壊されてしまいました。津波は、その猛威を止められるようなものが何もなく、内陸部深くまで及ぶこととなり、1700人の乗客を乗せた列車をまるごと飲み込み、引きずりまわし乗客全員の命を奪ったのでした。我々の H2H、津波特集号に、この不運な列車の写真が掲載されています。私が言いたいのは、自然が猛威を振るう一方、人間が被害をさらに大きなものにしていく、ということなのです。地震やハリケーンといった災害が起こるとき、私たちは何度も繰り返しこういったことを目にします。カリフォルニアの大きな地震で数十人の死者が出る一方、それよりも小さな地震がアジアで起きたとき、数千人が犠牲になります。フロリダを襲ったハリケーンで12人の死者が出ましたが、フィリピンを襲った台風では数百人の死者が出ました。人々がその仲間を守ろうとしないのであれば、自然がすべて悪いとは言えないのです。

ババが腐敗と闘うために何もしないという不満に関してですが、次のようにお答えしたいと思います。今日の社会において、腐敗は(重大な邪悪ではありますが)一つの邪悪にすぎません。根本的な原因はダルマ(正義)からの逸脱です。神の化身はダルマに立脚することの必要性を人に思い起こさせるためにやって来られます。これはラーマ神がご自身なりのやり方で行ったことですが、クリシュナ神もそうでした。ババもまた、ババご自身の方法で同じことをします。ババは愛というメッセージを静かに広めることでそうしていらっやいます。それほど多くの人にはどうやってかは知られていませんが、アーンドラ・プラデーシュ州、ワツランガル地方のテロリストの多くはババの魅力に魅せられてからというもの、生き方を変え、平和な生活を送るようになりました。事実はほとんど知られていませんが、私は知っています。そこでセヴァをしている人々と話をしたことがあるからです。それに、ここの人たちが何百人も束になってやって来て、彼らの変容を喜んでいるのを見たことがあります。ああ、変容は編集して見せるような話題ではないのです。いつもブラックベリー・ヘッドライン・ニュースにチャンネルを合わせているような人たちがどうやってそのことを少しでもわかるのでしょうか？

私はスワミ・アグニヴェーシュの社会的な活動を尊敬していますが、スワミがヴェーダーンタを少しでも読まれているのかどうか疑問に思わざるを得ません。おそらく彼はそんな必要はないと思ってらっしゃるので

しょう。しかし、人がアダルマ(不正義)に対して戦いを挑むという義務があるのであれば、何の義務も持たない神(クリシュナははっきりとそう言っています。スワミジがギターをお読みになればわかるのですが)は、ただ忠告を与えるのみです。神がクルクシェートラの戦いでなされたのは、そういうことです。このユガ(時代)において、神の化身は愛という武器を使って、アダルマと闘うようにと言います。それこそが、シュリ・サティア・サイ・オーガニゼーションのボランティアたちが北はダージリンから南はケーララに至るまで一年を通して、静かに黙々と行っていることです。

私たちはこれらの心温まる物語の数々を伝えることに全力を尽くします。少なくともあなたがたの何人かは苦もなく読んでくださることを願って。残念ながら、無私の愛に基づく物語を、多くの帰依者はあまり熱心に語ろうとはしません。人々はゴシップの方をより好んで受け入れるようですが、もし多くの帰依者自身の好みがそういうものであったとして、帰依者たちが良い話をするのが、噂や根拠のない情報から出たものだとしたら、メディアを責めることができるでしょうか？ 詳細にわたってお話した、これらの心温まる話を調べるためにどうぞH2Hの文書館(アーカイブス)を訪れてみてください。それらはすべて無私の奉仕という氷山の一角を成しているにすぎないのです。

スワミ・アグニヴェーシュさん。私たちは活動家の戦略に従いますが、静かに黙々と働きます。また彼らは黙々と働く人に仕えます。私はあなたがしていращやることに反対しているわけではありません。人は、時には注意を喚起するために、不正に対して大きな声を上げるべきです。しかしだからと言って皆が皆そのような方法を取るべきというわけではありません。クリケットでは、速球の投手もいればスピンの得意な投手もいます。両者ともチームを構成している以上、野手や打者にとっては良い効果をもたらします。ですから、スワミジさん、1)どうかお願いしますから、私たちとやり方が違うからといって、私たちを侮辱したり、馬鹿にしたりするのは止めてください。2)サイ・ババが通りへ繰り出すことを期待しないでください。ババは道しるべとして働いているのです。ちょうどクリシュナ神がそうだったように。

ここでスワミが、グジャラート地震と津波の時にどんな救済活動をしたかを話すつもりはありません。しかしながら、国そのものが重大な危機に瀕していたとき、ババが保護に乗り出したという、あまり知られていない小さな出来事について少しばかりお話しておきましょう。あなたがたのどれくらいの方が、1962年、中国が突然、インドへ予期せぬ進撃をしたことを覚えておられるかはわかりません。私は当時のことをとても良く覚えています。私はその時ボンベイにいましたが、インドと中国は兄弟のようなものだという意味のヒンドゥー語のチニ・バイ・バイという歌を皆で歌って長い友情の酒宴を催していました。西洋における偏見のおかげで、中国が広く閉ざされている一方、インドは国際的な見通しの良さを享受していた時代でした。中国の周恩来首相が当時の原子力エネルギー施設、後のBARCを訪れたのを今でも覚えています。インドネシアのバンドンで会議が開かれ、中国のリーダーたちがインド航空でやって来たときのことです。飛行機は仕掛けてあった爆弾によって爆破されたのですが、幸運にも大勢の人が助かりました。

我々は、中国とはとても友好的な関係にあると思っていましたが、実のところ、中国は、英国によって引かれたインド、中国間の国境線に対して少しも快く思いませんでした。たくさんの論争が起こり、ついに1962年10月、中国は現実的にインドへ進軍したのでした。ネルー首相はひどいショックを受けました。その一方、侵攻軍は、特に東部での進軍が目覚ましく、アッサムにあるテズプール郊外へと移動しました。これは信じがたいことでした。中国人たちは実際にインドの平地に迫っていました。山から遠く離れていたわけではなか

ったのです。インドは必死でアメリカに抗議しました。当時アメリカはソビエトとのキューバ・ミサイル危機をやり過ごしたばかりでした。アメリカはすぐさま援軍を送りました。私は鮮明にアメリカの飛行機が、サンタ・クルーズ空港に20分おきに降り立つのを見たことを覚えています。山間部での戦闘に備えて銃を運んでいたのです。(私たちはこういった飛行機が飛んでいるのをいつも見ることができました。)

さてこれが一体サイ・ババとどんな関係があるのでしょうか？ ちょっと待ってください。中国の軍隊が(まったく何の備えもなかった)インド軍をあっという間に片付けた、ちょうどその時、ある人々がスワミの所へ行き、こう言ったのです。「スワミ、わが国が重大な危機に瀕しています。あなたは何かなさるべきです」。スワミはこう答えただけでした。「何も恐れることはありません。何も起こらないのだから。ここは、ブンニャ ブーミ(聖なる地)です。中国軍は立ち去るのみです」。ほとんどだれもババの言うことを信じませんでした。しかし、実際何が起こったかわかりますか？ 1962年11月21日に、何ら抵抗されることなくインドへ侵攻していた中国軍が、**一方的な停戦宣言**という名目にふさわしい行動を取ったのでした。**降誕祭のちょうど二日前のことです！** それ以来、両国は友好回復に向けてより一層歩み寄るようになりました。

もちろん、疑り深い人々は、中国侵攻軍による一方的な停戦の宣言とか、その後の撤退とか、そのどちらにもサイ・ババは、何にも関係していないと信じているでしょう。けれど、神の化身は人々を納得させるためにここにいるわけではありません。ババは救いを求める人を助けるために、ここにおられるのです。そのあり方は、今までずっとそうであったように、これからもそうあり続けるでしょう。私自身の体験から次のことを付け加えることができます。ときおり、神の化身は我々が、理屈に合わないとか望ましくないと思うことをなされます。おそらく人の言葉で言うと、それらの行いがそうなのでしょう。しかし、物事をもっと大きな視点で見ると、そうではないのです。しかも、神の化身との関係は、信仰心と無条件の愛ということにつきますのです。クリシュナ神は第12章(ギター)でこのことを明確に述べていますし、細かいところまで同じです。コンマの位置まで何ら変わりありません。ときどき神は、我々にその信仰が確固たるものか脆弱なものか(ぜいじやく)をわからせるために、疑いの念を抱かせます。神の化身は助けにやって来て、教え、導くのです。しかし、神は同時に、(クリケット用語を使っても良いとしたら)難しいグー・グリーボールを投げて試します。クリシュナ神はこれを簡潔に説明しています。クリシュナ神は言います。(第7章)

——「おお、アルジュナよ。私は過去に生きていたものたち、現在生きているものたちそして未来において生まれてくるものたち、すべてを知っている。しかしだれ一人として私を知るものはいない！

私の創造力という力に覆われて、私はすべてのものから姿を隠している。混乱した世界は、生まれることも変化することもない私というものを認識しない！

三つのグナ(創造物に埋め込まれた特徴)の現象に惑わされて、世界は創造の束の間の様相を超越した、不滅の存在である、私というものを認識できないでいる。

真に、この私の神聖な幻影(マーヤー)は乗り越えがたいものである。しかし、唯一私を避難所とする者だけが、このベールを突き抜けることができるのだ！」——

第9章でクリシュナ神はさらにこう付け加えています。

<http://www.sathyasai.or.jp/>

——「宇宙全体を支配する神としての、私の超越した本質を知らずに、愚か者たちは、ちっぽけな人間の姿を取って現れた私を軽んじる。

悪魔のような、非道で人を誤らせるような気持ちを抱いている、思慮のない者たちの願い、行いそして知識は、実に虚しい。

しかるに、偉大な者たち、おお、パールタよ。自らの(内なる)神性に導かれ、私をあらゆる存在の不滅の源であると知っている者たちは、つねに私を思い、心からの崇拜を捧げる」——。

これがすべてを物語らんことを願います。アヴァター[神の化身]はマーヤーというクモの巣の糸を織り込み、「疑り深いトマス」を選別します。忠実な人々は、疑り深い人々にとっては愚かしく、馬鹿げて見えるかもしれませんが、神に関する限り、彼らこそが救われる者たちなのです。

合理性という名の下に、頭で生きている者は神の化身の試験に失敗するでしょう。なぜならこのテストは純粋な論理の境界を超えた事柄を扱っているからです。クリシュナ神が断言したように、神は内在するものとして隠れており、そこに表象としての宇宙が存在しているのです。しかるに、神は宇宙が存在しなくなっても、存在がなくなることはありません。神は永遠であり、神の永遠なる姿は、時間と空間を超えた、神性という目に見えない形の表れだからです。哲学者たちは、それは冷徹な論理を超えた^{ハート}心の領域にある、と明言しています。

この領域は時空間を超えたところにあるかも知れませんが、それでも、もし人がそれを頭ではなく^{ハート}心で求めるならば、地上でも近づくことはできます。アインシュタインは、頭で科学を追求しましたが、自らが言うように、「宇宙の宗教性」というすばらしい感覚を体験することとなると、心を持って追い求めたのでした。同じ感覚は瞑想を通してヴェーダの師たちによって求められ、また他の人々においては、たとえばマザー・テレサのように無私の愛を与えるという単純な方法によって、求められたのでした。体験という世界は、見せかけや幻覚といった言葉で片付けられてしまうかもしれません。しかし、合理主義者でさえわくわくするような、興奮した感情を体験します。チャイタニヤ・マハープラブーがほとんどいつも体験していた無上の至福は、体験という測りの最高の極みにありました。合理主義者にはあり得ないかもしれませんが、ティヤーガラージャは、心を込めて歌うことを通して、ラーマとの深い交流の中で体験したのです。おそらく他の文化においても多くの人々にとってそうであったろうと思われます。私は、当時22歳くらいだった若者、ハイゼンベルグ[ドイツのノーベル物理学賞]によって書かれた言葉をはっきりと覚えています。量子力学の発見へと導く画期的な進歩を成し遂げたあとまもなく、ハイゼンベルグは妹に宛てて手紙を書きました。私が覚えている限り、ハイゼンベルグはこう書いていました。「神が宇宙という交響曲を書いているところを、私は、そのすばらしい神の肩越しに見ているかのように感じたのです！」。

11. 誤った情報への対処法

読者の皆さん！ 私たちは、ある程度までは、しかるべき地位の筋から、私たちを惑わせるようなもくろみ

<http://www.sathyasai.or.jp/>

があるかも知れない、と注意すべきです。しかし、同時にガラクタの立てる音に揺さぶられないようにしましょう。たとえば、そのような騒がしい烏合^{うごう}の衆の一人が、サイ・ババは原子爆弾を支持していると言います。なぜならこの男によると、ババが、ある時期、「インド原子爆弾の父」と呼ばれた(故)バガヴァンタム博士(Dr.Bhagavantam)と親しくしていたからです。と、この男は言います。私はたまたまバガヴァンタム博士のことを二、三知っているのですが、バガヴァンタム博士の科学的な貢献についてだけでなく、職業的な経歴のこと、そしてスワミとここで過ごしていたことに関しても、です。バガヴァンタム博士の職業的な経歴に関する限り、バガヴァンタム博士は、科学者としての師、サー・C・V・ラーマン(Sir C・V・Raman)先生の監督の下、ラーマン効果に関して早くに業績をあげていました。後にバガヴァンタム博士はラーマン効果に関する本を書いています。実際一等最初のもので。その後、バガヴァンタム博士は分光器のデータの解析に対して群論を応用する分野へと袂を分かちましたが、博士とヴェンカタラユドゥー氏(Venkatarayudu)との共著は、他の本が出されるまで、とても有名になりました。その後、バガヴァンタム博士は磁気空間群に関して、また固体における大規模な磁気データの解析のために、それらをいかに活用するかということにおいて、見事な業績を数多くあげました。専門家として、バガヴァンタム博士はアーンドラ大学の物理学の教授でしたが、後にバンガロールにある、あの有名なインド科学大学の理事になったのでした。そのころ、スワミはときどきインド科学大学にあるバガヴァンタム氏の自宅を訪れていました。バガヴァンタム博士は防衛大臣への科学顧問としても働いていました。私を知る限り断言できますが、バガヴァンタム博士はインドの原子力計画の由来とはまったく何の関係もありません。私は、8年もの間原子力エネルギー部門で働いていたから、知っていて当然です。実際、最初の原子力装置を開発した人々の名前はインドの大衆に良く知られていますし、私も個人的に知っている人たちがほとんどです。彼らの中には、私の以前の上司、(故)ラージャ・ラーマンナ博士(Dr.Raja Ramanna)やかつての同僚、P・K・イェンガー博士(Dr.P.K.Iyengar)がいます。

バガヴァンタム氏と原子爆弾の間に一体どんな関係があるのでしょうか？ それでは、以下のようにきわめて直接的なやりかたでお教えしましょう。(ところで、我々のもとにはバガヴァンタム博士が自らこの話をビデオカメラの前でしているものがあります。それは何年も前に一人のアメリカ人の手によって撮られたものです。その時のフィルムの一部がありますから、たぶんサイキャストで放送することになるでしょう。)バガヴァンタム博士が、スワミのもとへやって来てしばらくすると、ババはバガヴァド・ギターについて何か知っているかと尋ねられました。バガヴァンタム博士は知りませんと答えました。その時スワミが言ったのは、それは残念なことだ。原子爆弾の父、ロバート・オッペンハイマーは、1945年、ニューメキシコの砂漠で初めて、最初の核実験を目撃したとき、ギターから有名な詩の一節を思い出したというのに、これはとてもよく報道記録された出来事でした。その時オッペンハイマーが思い出したのは、千の太陽よりも燦然と輝くクリシュナ神が現れたときのことを詠った詩でした。この詩は第11章(ギター)に出てきます。爆裂する爆弾の輝き、その途方もない力がオッペンハイマーに特にこの詩を思い出させたのでしょう。ところで、オッピーと呼ばれていたオッペンハイマーは、ギターをただ原典で読みたがためにサンスクリット語を学んだのでした。バガヴァンタム博士にこの出来事を語ったあと、スワミはアメリカの科学者がギターを知っているのに、インドの科学者が知らなかったとは残念なことだと言いました。そう言いながらスワミはバガヴァンタムのためにと、二人がチットラーヴァティー川の砂原にいたとき、ギターを一冊、砂の中から物質化されました。これが唯一、バガヴァンタム博士とインドの原子爆弾の間にある関係です。いかに無知が事実^{じつが}を歪めるものかおわかりになったでしょう。私たちは、こういった人たちの主張を信じ込まされることになるのです。

しかし、それが今日の社会の状況なのです。その規範は嘆かわしいほどに落ちています。幼児虐待という

言葉が出た瞬間、その申し立ては信用され、テレビはえせ法廷を演じ、静止気象衛星を通して通信する一人の陪審員に基づいて、評決を伝えるのです！ 私はこう告げられたのですが、(皮肉にもかつてはマハート・マンガディーの息子が編集していた)ヒンドゥスタン・タイムズでちょうどそのころ、反スワミの記事や何かが一緒に出ており、英国のガーディアン紙も同様な申し立てをしたのでした。ガーディアン紙は高い評価を受けていただけに、これは本当に残念なことでした。しかし、最近のジャーナリズムの規範は、もはや以前のようにはなくなっているのです。私はインドの一流の新聞がその一面に処刑の写真を載せるようになった今日まで生きるとは思ってもみませんでした。実際、12年ほど前、大衆の吊るし上げが近隣諸国で共通の風潮になったとき、そのようなショーは野蛮な行為の極みだと言われたものでした。しかし先週、そういった規範は、インドでは尊敬すべき新聞だと思われていたはずの新聞によって、風に吹き飛ばされて行ってしまいました。そうです。私たちは良識など関係ないといった時代に生きているのです。

最後に、読者の皆さん、特に若い方たちに、こう訴えたいと思います。あなたがたの前には大きな機会が開かれています。あなたがたがその真の性質を発見し、その発見があなたがたの周囲そして世界全般を良くして行くのです。あなたがたの潜在的な力を過小評価しないでください。今日あなたが置かれている立場は、小さなものかもしれませんが、しかし明日はどうなるのか、だれにわかるのでしょうか？ 16歳の少年だったとき、クリントンはホワイトハウスでケネディと握手をしました。何年かのち、クリントンはホワイトハウスを占めるようになり、ホワイトハウスを去るときには、アフリカの貧しい人々のために多くの慈善をなす立場にいました。実際、クリントンは今もそれを続けています。全能なる神は大きな役割を演じる人々を探しているときに、あなたを見過ごしたりはしません。

ですから、どうかぜひ霊的な文献を、ときおり読んでみてください。読んで、考えてみてください。なぜならそれだけでもあなたの精神(マインド)を深めるからです。あなたの視野を広め、あなたにどんな手助けができるのか考えてみてください。あなたにできることはたくさんあります。たとえばあなたに書く才能があれば、今日のような時代に愛と正義が勝利するといった物語を、私たちのために書いてください。多くの人々は、これらは話としては良い話だが、実際にはうまくいかない、と思っています。最後に神は必ず勝利します。これはハリウッドの決まり文句ではありません。正義(ダルマ)の現実なのです。もちろん、邪悪は短期的には目覚ましい成功を収めるかもしれませんが、歴史的に邪悪が永遠に勝利を収めたためしはまずありません。それは、邪悪ではなく、正義が創造の基本である、という単純な理由から、あり得ないのです。

実際問題として、私は読者の皆さん、特に若い方たちには、ワミの教えだけでなくスワミがやってきたことの詳細に関しても、良く知ってもらおうよう時間を割いていただきたいと思います。残念ながら H2H が本当はどういうものなのかといったことは驚くほど知られておらず、Sai Inspires [H2H が発信しているババの御言葉の日刊のメール配信サービス]の奉仕が H2H によるものでないと誤解している人たちも(昔のサイの学生たちも含めて)たくさんいます。また、依然として多くの人が実際に週に七日、一日二十四時間やっているラジオ放送のことを知っているわけではありません同様に、80年御降誕祭に際して、(病院や恵みの水プロジェクトも含めて)バガヴァン・ババの人生と使命に関する800ページに及ぶ写真が掲載された、豪華な、きわめて貴重な五つの写真集のセットが出版されたにもかかわらず、あまり多くの人には知られていません。もっと悪いことには、たとえ知っていたとしても、あまり関心を持たれていません。スワミの使命と同様にその教えにほとんど興味がないのに、スワミをそれほど知りもしない外の世界からより良いものを何が期待できるのでしょうか？

ちょうど本日、私たちは、悩める親御さんから、自分の子どもが「現世を超えた存在」以外、世界にほとんど関心を持たずにいる、というメールをいただきました。しかし、それならば、もし人々が私たちを助けることに興味を持ったとしたら、私たちは、あまり恵まれていない人たち、人類や自然一般の世話をしたいと思っているたくさんの人々に働きかけることができます。

12. 最後に

これはかなり長い論説文になってしまいましたが、最後に、皆さんにお伝えしたかった重要なポイントを整理したいと思います。

- 私の目的は二つあります。一つ目は知らせること、二つ目は、（神様は禁じていらっしゃるが！）将来、帰依者自らが、必要なときに、時と場合に応じて強く反論することができるように、十分なデータで武装できるようにするためです。
- それに加えて、最近、若者も含めて、スワミのもとへやって来た人たちが、神の化身がどういうものであるか、より良い全体像が持てるように、多くの事柄を詳細にわたって述べようと試みました。
- スワミが指摘したように、人として生まれてくることは、自分自身を取り戻して神へと返って行けるようにと与えられたチャンスです。ババは言っています。私たちは神から生まれ、神のもとへと返って行かねばならない、と。
- 具体的には、私たちは人生を霊的に高めて行かねばならないということです。また、それは、私たちはこの宇宙の起源、本質、そして宇宙そのものと完全に調和していく必要性をつねに意識しながら、^{しんじん}真摯な努力をもって、人生を送らなければならないということも意味しています。
- もし私たちがそのように人生を送るなら、その時は少なくとも私たちの周りの幾人かは影響を受け、その魔法の力で変容することにもなるでしょう。
- 私たちはこの善意の広がりという可能性を過小評価すべきではありません。大きな山火事は、しばしば小さな茂みの火事がつながった結果です。自然には、他にもひとりで組織された臨界状態の例がたくさんあります。もし善意が広がって行けば、危機的な境界線が乗り越えられて、物事が良い方向へと変わる段階が必ずやって来ます。そのような変換は個々の人生において起こってききましたが、この惑星と人類社会の双方が救われるためにも、私たちは人間性をそ^{かじ}ういった肯定的な方向へ舵取りをして行く必要があるのです。

前途は楽なものではありません。かなり困難で、否定的な態度で無責任な話をする人々という形を取った多くの障害に出くわすこととなります。私たちが前進する際、これらすべての風雨に耐えて行かねばなりません。

そういうとき、今まで私が述べてきたことが、いくらかでも役に立つであろうことを願っています。

最後に、神が人として降りて来られたことが、本当に有り難いことなのだということに、私たち皆が気づくことを切に願っています。神が降りて来られているのに、たとえどんなに良いものであっても個人的な計画を進

めようという気持ちから、神性を弱めてしまうという具合に、この貴重な機会を無駄にしまってはいけません。数年前のご講話で、スワミは力強く言いました。「個人的なモークシャ[解脱]を追及することが何だというのですか？ 外へ出て行って人々に奉仕しなさい。そうすれば、神はあなたを捜しにやって来て、たとえあなたが欲しがっていなくとも、あなたに解脱を与えます！」。

私たちは神に至るところに見出すよう、その体験に愛と奉仕で共鳴するようと言われてきました。それは私たちが頭を超えて、ハートの領域を見るときにのみ起こり得るのです。

頭の中の架空の領域の罫^{わな}にはまってスワミを非難している人々が、真の愛と変容を体験できるよう祈りましょう。彼らが言うように、今日の聖者は昨日の悪魔で、今日の悪魔は明日の聖者となることでしょう。それが熟して甘い果実になるまでに、多くの段階が越えられなければなりません。そうして、危機に対処する一方で、私たちは浮かれたり、より大きな視野を見失ったりしないようにしなければなりません。

具体的には、私たちは古^{いにしえ}の英知という泉からつねに水が飲めるよう、時間を取っておかなければならないということです。Eメールやブログをチェックしたり、株価を追いかけたり、といったことだけでは不十分なのです。ヴェーダーンタはこう言っています。人生で演じるべき役割の一つとしてすべてのことをなせ。しかし、より大きな視野を犠牲にしてはならない、と。

アーディ・シャンカラの言葉を借りて言わせていただくと、最期を迎えたときに我々を救ってくれるのは、クROIチゴではなく、神の御名のみなのです！

神様の祝福のあらんことを、ジャイ・サイ・ラム。

00—00—00

「愛はあなたのもっとも偉大な財産です。愛を育て、いつも真実を語りなさい。人々は偽りをたやすく喜ぶものですが、真実は辛く響きます。人々は、玄関まで運ばれる牛乳をおいしいとは思いません。それなのに一本の酒を飲むためには何マイルもずっと歩き回る覚悟です。虚偽は日々の習慣となってしまうました。虚偽は他人を喜ばせるかも知れませんが、あなたの良心を満足させはしません。他人を満足させる前に自分の良心を満足させる努力をなさい。どんな状況のもとでも、真理（真実）の道を歩みなさい。真実を語る事が何らかの危険をもたらすかも知れないようなときには、黙っていなさい。」

——ババ

以上で語られた項目のいくつかに関して、もっと詳しい情報を知りたい方は、これまでのH2Hの掲載物から次のものをご覧ください。

1. God, The Avathar and The Intellectual(神なるアヴァターと知性)[H2H2006年2月号]

<http://www.sathyasai.or.jp/>

2. The Inevitable Collapse of Calumny(誹謗中傷の必然的な破)[H2H2006年7月号]
3. Letter to the Bureau of Public Information, UNESCO in 2004(2004年ユネスコ広報事務局への手紙)
[H2H2006年7月号]
4. An unprecedented miracle of life...and Divine Love(新しい奇跡の人生...神の愛)[H2H2006年7月号]
5. Faith, Fortitude and the Divine Touch(信仰、不屈の精神そして神の感触)[H2H2006年9月号]
6. Truth will always triumph(真の意志はつねに勝利する)[H2H2004年3月1日号、5月第2版]

どうもありがとうございました。サイ ラム。

出典:http://media.radiosai.org/Journals/SpecialArticle/GOD_AVATAR_AND_THE_DOUBTING_THOMAS.pdf

翻訳:SSP(矢鉾二美代)